

海外旅行の今昔

(一) アメリカ遊学

関東大震災の翌年、四月下旬、大阪商船のアリゾナ丸で横浜を発つことになった。これよりさき、神奈川県立商工実習学校の同僚、栗原邦志君の奥さんの伯父さんという方が加州の桜府サクラメントで農場を経営しているので、米国へ行くならそこへ立ち寄ったら如何？ と勧められた時、栗原君から種々と米国事情を教えて頂いた。また、その伯父さん経営の「桜府日報」という邦人向けの新聞を、もし希望するなら、手伝いながら勉強したらと勧められて、自分にも渡米後の見通しが明るくなった。

それに私と同じ船で、横浜高工出身のS君がその婚約者の美ちゃんと渡米するといふので、私が御兩人の後見役兼ガイドを勤めることになった。

出帆の当日、親戚をはじめ、栗原君その他同僚諸君及び多数の生徒の見送りがあった。

父親となつたばかりの私にとって、妻子との別れはさすがに辛かった。栗原君はその時私に「あんな綺麗な奥さんや可愛いお子さんを残して、よくまあ、君は外国などへ行けるね」と言つた。後で考えると、まるで、離縁状でもたたきつけて飛び出した不実極まる亭主野郎と、友人の眼には映つたであらう。然し自分ではあくまで近い内に妻子を呼び寄せるんだと心に定めていた。

さて、その頃の円貨は比較的強含みで正金銀行で百円につき四十二弗替で換えて貰つた弗が、シカゴに着くまでに三十七弗にまでなつた。

初めての船旅は頗る快適だったが、アリゾナ丸には、これといつて娯楽設備もなく、晴天なれば、デッキゴルフをするのが唯一の楽しみだった。茫漠たる太平洋の水平線に揺曳する雲や、美しい日没を眺めるのが眼の保養で、たまたま波間に遊泳するドルフィン（いるか）を発見すると海の神秘に触れる思いがした。

船客の中に、永らく暮らしていた神戸からカナダのヴィクトリアに隠棲して余生を楽しもうという英国人がいた。私はこの老人を相手にしばしば英会話の勉強をした。この船では一等船客は少なく、多くは米国への移民だった。

私の船室には母校早大の商科を卒えて渡米する岩田という青年がいた。彼は剣道三段の猛者で、将来の活躍を夢見ていた。私が下段のベッド、彼は上段のベッドで寝ることになった。初対面の時、彼は私が母校の先輩であることを知って、「先輩、宜しく願います」と言った。私はそれに対して、「先輩どころか、どうやら心配の方だろう」と言って笑った。

船の食事は素晴らしいもので、普通のレストランの食事の比ではなかった。特に朝食時のオレンジは美味だった。大きな波のうねりで、窓から、青空を背景としてマストが上下動しているのが見える。ナイフとフォークを手に、自分の身体から緩やかなシーソーの律動を感じる。このリズムと味覚とが海に乗り行く者の喜びである。横浜を発って、カナダのヴィクトリアに寄港した。例の神戸からの老人とは此処で別れた。ヴィクトリア港に入ると、兩岸には黄色いホーソン（エニシダ）の花が盛りだった。その黄色が海面に映じて美しかった。船の荷役のために数時間停船した。私達は直に上陸して付近を見物した。とにかく、アメリカ大陸に足跡を印したのだ。これより先、船の甲板から遙かに米大陸を望見した時、はるばる来たもの

だと思ったが、いよいよヴィクトリアを出帆してシアトルに向かった。この航程は短く、移民局からの役人が船まで来て面接が始まる、渡米の目的をはじめ、所持金は十分かなど尋ねるのである。それに眼の検査がある。これは勿論、トラホウムの検査である。このところ毎晩夜ふかしをしているし、時差の関係もあって眼が充血しているので、皆、日本から持参した目薬でその充血を治すのに大童だったが、眼の検査は案外簡単で、特に検眼はせずOKとなったので一同ホットした。これで首尾よく十二日間の航海を終ってシアトル港に到着、無事に上陸した。

岩田君とは其処で別れた。S君と美っちゃんの出迎え人は来ていなかった。私の方は三井物産から誰か来ているはずだが、それらしい人は見えない。それでしばらく待っていると、一人の日本人が近寄って来て、私に話しかけた。「誰か迎えの人があるんですか」というので、「実は三井物産からの迎えの人が来るはずなんです」と私が答えると、「では物産へ連絡して見ましょう」といって、彼は近くの公衆電話で物産へかけてくれた。物産の方ではうっかり出迎えの時間を間違えたので、そのお客様を会社までお連れしてくださいとのことだった。この人（運転手）が私共

を会社まで連れて行ってくれたので大助かりであった。

その晩は、庶務の松下さん（東京外語出身）の御紹介で、十階建のホテル・フライの八階の部屋に泊ることになった。出迎えの方が見えなかったのでS君と美っちゃんも一緒に。上陸第一夜、市中には灯火がきらめき出した。ホテルの向かい側の街角から夕刊売の「パイパー、パイパー」の呼び声が聞えて来た。それは排日法案を告げる陰悪な声であった。今や異境の空の下で、ホームシックが忍び寄らんとする折、妻子の呼び寄せが恐らく不可能になるであろうという絶望感によって自分の心は極度に減入ってしまった。でも、どうしようもない。明日は松下さんの御案内でシアトルの近郊を見物し、その翌日はサクラメントへ向う予定である。

第二日は主として物産の車で観光に時間を過ごした。昼間の観光が終って、夜は中華料理の接待を受けた。松下さんには種々とご厄介になった。その後、松下さんには一度もお目にかかっていませんが、研究社の「英語青年」通信欄で同氏の「シアトル通信」の中でアメリカの風物や米語の実用的表現が紹介されているのを見たことがあった。

翌日サクラメントに向かう。広々としたオレゴン州の牧場を通過し、加州に入る。サクラメントに着くと、早速、栗原先生の伯父さんのお宅を訪れる。サクラメントはさすがに加州の首都だけあって、清潔で静かな所である。気候の暖かいせいか、植物は繁茂し、南国を思わせるものがあつた。

栗原さんの伯父さんは沖さんといって、日本人会の会長を勤め、また「桜府日報」の社主であり、大きな農場の所有者でもあつた。沖夫妻は実に親切な方達であり、また二人のお嬢さん達も明朗快活な性格で、その日私共に手料理のお寿司をご馳走して下さつた。それからご主人の車で農場を案内して頂いた。その晩S君と私とは市内のホテルに泊り、美っちゃんは沖さんのお宅でご厄介になつた。

翌日桑港に行く。サクラメントからは僅かな距離だつた。私達は邦人経営のホテルに宿泊し、次の日にはオークランドの加州大学を見学した。キャンパスを一巡して、大学の運動場を最後に観た。その広大なのにはびっくりした。当時オークランドの全人口七万五千人を収容できるスタンドの設備があつた。

いよいよ、次の日にはS君や美っちゃんと別れて、私は独り、午前八時の所謂デ

ーライト・トレイン（昼間列車）に乗ってロスアンゼルスに向かった。桑港から約十二時間の行程である。スタインベックの郷里サリーナスの海岸を右に見て列車は南へ走る。この辺の海岸にはちよつと日本を思わせる植物が点在した。昼頃となり、列車が徐行して駅に近付くと、「トライアングル」という三角形の金属を「チーン、チーン」と鳴らしている。昼食ができたという合図である。列車はここで約二十分停車。運転手を初め車掌が下車する。

食堂内には大きな扇風機がゆるやかに廻っている。牧童のような男が、例の縁の大きな帽子を被って入って来る。この雰囲気には自分はまるで西部劇の中に飛びこんだような錯覚を起こした。食事はゆっくりとるものだが、運転手や車掌より遅くなつてはならない。食事が済むと、彼等に倣つて列車に戻る。けたたましい汽笛一声で、列車は再び南へ向かつて鉄路を走り出す。こうしてロスに着いたのは午後八時頃だったであらう？

駅には一人の老齢な紳士が出迎えに来てくださった。それはかねて恩師高杉先生から紹介状を頂いていたソーパー先生だった。先生は東京の青山学院で二十年

間宣教師として聖職に従事され、先年このロスに隠棲された方である。すでに七十歳を越えたご老体のお出迎えを受けて全く感激した。

先生はタクシーを拾って、邦人経営の大和ホテルへ私を案内し、宿泊の手配をして下さった。

翌日私はソーパー先生をグレンデールのお宅に訪れて、昨晚のお礼を申し上げたところ、ご家族の方々にもお目にかかり、晚餐までご馳走になった。キリスト者の家庭における食事はまず感謝の祈禱をもって始められる厳粛なもので、私は今までに経験したことのない敬虔な気持で一杯になった。

私はご家族の方と日本の近況などを話し合った。特にお嬢さんはハイスクールの先生をなさっている明朗な方で、快活な口調で盛んに社会事情などをお尋ねになったのが印象的だった。

お宅を辞去する前に、私がシカゴへ勉強に行くことを知り、「シカゴへ行くなら、エバンストンのノース・ウエスタン大学においでなさい。あそこの学長はわしの息子なので、何かと便宜を計ってくれるでしょう」とおっしゃって、あらかじめ用意

してあったらしく、その息子さん宛の紹介状を私にくださった。

ロスには約三週間滞在した。それも高杉先生のご紹介により、メソジスト教会牧師の宗先生の計らいで、同教会員で亜細亜商会勤務の長谷川さんのお宅に下宿することになった。このご夫婦がまた良くできた方達で、聖日には午前中私をその教会へお誘い下さり、また午後には副牧師のご案内で、有志の教会員の方達と一緒にロング・ビーチ等の海岸へピクニックに連れて行って下さった。

当時ロスは着々米国屈指の大都会に発展しつつあって、郊外のインピリアル・ヴァレーは日本人の労力によって開拓され、しかも付近に油田が開発され、産業の躍進が期待されていた。それに映画製作の本拠地たるハリウッドでは、メーリー・ピックフォードや、ダグラス・フェアバンクス等、無声映画でお馴染みの俳優達がここに居を構えてファンの注目を浴びていた。

哲人エマースンも言っているように、ロスは健康地であり、静養の場所として理想的な処である。そうした恵まれた自然の中で若い者も一段と活気を帯びているようだった。

一週間程ハイスクールの見学をした。生徒には日本人がかなりいたが、フランス人もいれば、ドイツ人もいるという混成のクラスであった。女の先生がテキストに、サー・ウォールタ・スコット (Sir Walter Scott) の「アイヴァンホー」(Ivanhoe) を使用していた。邦人の生徒の多くは中卒で、大学出は少数だったので、このテキストは少々難解のようだった。

自分がかつて中学の英語教師をした経験があるので、二、三度先生の代わりに書取の朗読をさせられた。私の見学は僅か一週間であったが、懇切な先生のご指導と生徒の積極的な活動からは得る処があった。

ロス滞在中に、下宿の同居人で親切な方が、ある晩ハリウッドのグローマンという映画館に私を連れて行ってくれた。「十戒Ⅱテン・コンマンドメンツ」という映画で、すでに半年以上も連続上映中のものだった。当夜、車をパークすると、私達は映画館へ歩を運んだ。その館の屋根に向かって下からライトを照射している。そこにはエジプト・ファラオ王朝時代の鎧武者が長槍を手に歩き廻っていた。館内に入ると、宮廷の官女さながらの扮装をした女性がわれわれを座席に案内してくれた。

自分の背広姿が如何にも貧弱に思われた。

ステージで活人画式に表現された古代のシーンが暗転すると、スクリーンには現代社会の人間模様が映写される。これに伴う音楽的効果が素晴らしく、観客を夢の境地に誘う。この映画はその後一年も連続上映され、更にヨーロッパに渡り、ロングランを続け、私が帰朝後しばらくして再度この「十戒」に対面した。このフィルムは実に世界を駆け廻ったのである。

いよいよロスを発ってシカゴに向かう。四昼夜かかるというので、プルマン(Pullman 一等車)に乗る。その際、僅かながら傷害保険金を支払った。ソールトレークでモルモン教の寺院を参観する。退屈な旅ではあるが、雄大なアメリカの自然、遙か彼方に見える山脈、広漠たる草原や砂漠地帯、「シェーン」という映画でなつかしいコロラドの山々、デンヴァを過ぎて、列車は東に進む。昔開拓者達が切り開いたであろう路(trail)が延々と続いている。イギリスの文豪ルイ・ステイヴンスンの「草原を横切って」(Across the Plains)の記事を思い浮かべる。

シカゴに着くと、早々YMCAを訪れて、主事にお目にかかり、二、三日ご厄介

になる。主事は丁度これから野外伝道で一週間程出かけるので、「一緒に来ませんか」とお誘い頂いたのだが、大学のサマー・エキステンション（夏季講座）に申込む手続きがあるので、ご辞退した。そこで大学の下宿案内係（ハウジング・ビュロー）へ行つて適当な下宿を捜してくれるように頼む。すると早速、「大学の裏通りのケンウッド・アヴェニュー（Kenwood Avenue）のユニヴァシティ・ティ・ハウス（University Tea House）へ行ったら」と言つてカードを手渡してくれた。直ちにそこを訪ねた。街の両側に並木のある静かな場所だった。ミス・ベイカー姉妹の経営する軽食の店で、二階と三階に下宿人の部屋がある、赤煉瓦の三階建だった。階下は大学の教授や学生が昼食や夕食をとれる喫茶店のような構えで、二、三階には夏季講座を受講するために各地から来たハイスクールの教師達が下宿していた。自分もその連中の仲間に入り、二階の部屋に陣取った。下宿人は私以外に三人いたが皆ハイスクールの先生で、夏季休暇を利用して新しい単位をとるのが目的だった。

シカゴへ来て間もなくエヴァンストンのノース・ウェスタン（North Western）大学を訪れたがソーパー先生のご令息である学長はあいにく、欧洲へご旅行中との

ことでお目にかかれなかった。

エヴァンストンへはシカゴのミシガン湖畔から遊覧船が出るので、それを利用した。シカゴ市はこの湖に臨む大都会で、この湖畔には衛星都市が連なっている。遊覧船は安い料金で、しかも、船上で船客が皆音楽の伴奏でダンスに興ずることが出来るので、ウィークエンドにはなかなか混雑する。ダンスの心得のない自分は、ただ左手に移動する隣接の町村や、右手遥か沖を航走する幾多の船舶を見るのみだったが、用事を済ませての帰途、夜の帳の下りる頃、湖畔の都市に灯がともされ、延延二十哩にも及ぶこれら沿岸の町々は貴婦人の腕輪の如く輝いて湖面に映える。実に美しい。それに当時シカゴ最高のビルであったチューイング・ガムで有名なリグリーの建物の頂上から湖面に投射される青、赤、緑の三色が点滅して一層の美観を添えた。正に不夜城という言葉が相応しい眺めであるが、この夜の光輝の陰に幾多の恐ろしい犯罪が行われる暗黒面がこの大都会にはあったのである。

新聞記事でよく見かける誘拐事件もミシガン湖畔であった。巡邏中の警官がたまま湖の岸辺に打ち寄せられた酒瓶を拾い上げて見ると、中に一通の走り書きの手

紙が入っていた。それはギャングに誘拐されて、沖の船内に監禁されているとの訴えであった。早速シカゴ警察は悪人検挙に乗り出す。映画もどきの実演が行われる。これは私が下宿で、朝、シカゴ・トリビューン紙で読んだ事件の一つである。

ご存知の方もあると思うが、米国が十年間禁酒令を実施したときのことであった。この禁止令の裏を行く酒の密造が盛んに行われ、会社でも社長をはじめ社員が機の抽斗に酒瓶を忍ばせていたなどという話は映画でもよく見たものだが、密造の組織はギャングの連中で、例のブートレッガー (Bootlegger) はその非合法密造者のことで、スピーク・イージー (Speak-easy) とはそれを販売する所であった。ギャングの王様キャポネの全盛時代で、シカゴ市当局もギャングの跳梁に委せ、一九二三年の冬には焚く石炭も不足し、吏員の給料もしばらく凍結されたというほどだった。このシカゴ滞在中に横浜関東学院院长坂田祐先生にお目にかかった。当時ホームシックに罹っていた私を先生は大いに励まして下さった。先生は内村鑑三先生に師事して基督教を信奉するようになり、苦学力行の末、ミッシェン・スクールの名門関東学院を創立した方で、南原、矢内原、両東大総長と共に内村先生の高弟であった。

坂田先生は一高出身で、在学当時、対三高の野球定期戦で応援に駆り出されたが、野球のことは全然分からず閉口したとのお話を聞いたので、一夕先生の泊っていたエリス・アヴェニューの下宿へ出かけて行って、約二時間野球の講義をしたことを覚えていた。それは、その翌日、紐育ジャイアンツが市俄古^{シカゴ}に来てシカゴ・カブスとダブルヘッダーをすることになったので、その試合に先生をご招待して観戦して頂くための準備工作であった。

市俄古滞在中、坂田先生の一高時代の友人で神奈川県の内務部長だったという大島さんと、もう一人の方と四人で近郊のゲーリー^(Gary)市へゲーリー・システム(学業と職業との兼修、横浜市の浅野綜合中学が当初このシステムを採用したとかいうことを聞いている)の見学に出かけた時、将来、私がロンドンに行くようになったら、訪ねてご覧になると良いと言って、大島さんがロンドン滞在中下宿したドクター・クレイグ^(Dr. Craig)夫妻を紹介して下さった。ちなみにこのご夫妻には後に大変ご厄介になることになった。

さて、その時大島さんの話に、氏が一高在学中、軍人上りの体育教官が、風貌卑

しからざる大島さん（實際色白の貴公子だったであろう）を、てっきり陸軍大将大島閣下のおん曹司と勘違いして、「閣下は今如何ですか」と鄭重にご機嫌をとるのがおかしかったことや、県庁の連中が土曜日の午後など伊勢佐木町一丁目のMという羊羹屋の看板娘の美人を拝まんと出かけたもんだという話など、私達の間にはなつかしいハマの話題が多かった。

米国留学を志した当初は、妻子を呼び寄せ、ゆっくり勉強する積りであったが、上陸早々排日運動の気運が高まり、不安に思う日々が多くなった矢先に、父の健康があまり勝れぬという報もあって、最初の計画を変更して、短期間ながら英国に渡り、ロンドン大学で音声学を勉強しようと考え、シカゴは夏一杯で切り上げ、紐育を足場に東部の都市を見学して、カナダのケベックに出て、其処から大西洋を渡って英国へ行くことにした。

ペイカー姉妹のユニヴァシティ・ティ・ハウスに下宿中、最も親しくしたのはニューヨーク州、例のイーストマン・コダック会社のあるロチェスター市のハイスクリルの先生、Mr. Redding であった。彼とは帰国後もしばらく文通した間柄であっ

た。彼と一緒に市内見物、特に有名な Stockyard (屠殺場) の見学をした時だった。バスに乗って行った。例の二階のあるバスだった。市内見物にはバスの二階に限る。二人は列んで坐った。しばらくすると、車掌が上って来て、「ロウ・ブリッジ・アヘッド」と言った。こういう風に文字に表せば、何でもないのだが、最初、私の耳にはその言葉が十分捉えられなかった。隣の R 君は頭を下げた。はっと気付くと前方に低いガードがある。成程 Low bridge ahead! の意味が分かった。この時少年時代、横浜駅(今日の桜木町駅)前の弁天橋の橋詰からポンポン蒸汽に乗った時に聞いた「ゴウヘイ」(Go ahead) のことが連想された。R 君は身長六フィートもあるので、電線の下をくぐる山車^{だし}の人形よろしく頭を下げた訳である。自分はそのままでも頭が激突する心配がなかったので澄ました顔をしていた。

ストックヤードが近付くにつれて、悪臭が鼻をつきはじめた。バスから降りると、前方に豚を収容する柵が見えて来た。その柵の中で皮の笞^{むち}をピュー、ピューと打ち鳴らしながら豚を駆り立てる牧童がいた。豚が悲鳴を上げて柵の中を逃げ廻る。このように走り廻らせると豚の肉が美味しくなるのだそうだ。そして、しばらくする

と、柵の一方に出口があつて、結局はその狭い出口に豚を追ひ込み、屠殺室へ導くのである。

見学の男女は二十名一組となつて、エレヴェーターで階上に昇る。そこは長方形の相当に広い屠殺室で、天井に、一方からもう一方に流動する鉄のチェーン（索道）がある。部屋の片方の端へ駆り立てられた豚の姿が現れると、係りの男がその豚を逆吊りにして鉄索に吊り上げる。逆吊りとなつた豚の頭部は忽ち充血して真赤になる。宛らおろしたての白い毛筆を赤いインキに漬けたように。

「ヒー、ヒー」と悲鳴が参観者の耳を聳するばかり。この屠所へ運ばれる豚が部屋の中央近くに來た時、その大きな台に仁王立ちする毛むくじやらの男（これは猶太人の渡世とか）がまるで鐘馗様のように、手にした大きな肉切り包丁をしきりに磨いで、手許に近付く索道の豚の喉を目がけて、ズブリと突き刺す。途端にその喉からサツと血潮が噴出する。これを観た女性の見物人は、これもまた金切り声を上げて背後にのけぞる。やっぱり女だなあと見ていたが、しばらくすると、次の犠牲が血祭に上がるのを見ようと再び元の位置に戻る。そして、その「キャー」とい

う叫びを繰り返す。この時どうも女性の心理は分らぬと思った。この血祭りで屠殺室の床はすっかり血の海となり、まるで近松の「女殺し油地獄」の場面を思わせるものがあつた。

さて、こうして屠られた豚が切り刻まれて十数分の後には皿に盛られた豚料理となつてお目見得する。「さあ、召し上がれ」と勧められたが、胸がむかつて食べたものではなかつた。帰途幾度も心に誓つたものである。「今日からは俺もバーナード・ショウのように菜食主義者 (Vegetarian) になるんだ」と。

然し下宿に戻つて、空腹になると、男の誓も怪しいもんだとわれながら恥かしかつた。

もう一人の友人はガール・フレンドで、大学でフランス文学を専攻している *Mrs. Laura Hauta* というアイオア州から来た小柄な娘だつた。彼女は私共のユニヴァーシティ・ティ・ハウスにアルバイトで昼に手伝ひに来ていた。ある晩このローラを下町のヴォーデヴィル・シアタへ見物に招待したことがあつた。彼女とのお付き合いは、昼食の時、ミス・ペイカーの店の炊事を手伝ひに来て、その仕事が終わると、客

室で彼女も食事をするので、同席して食事を共にする程度だったが、いつも彼女の郷里アイオア (Iowa) の話などを興味深く語ってくれ、私にアイオア行きをしきりに勧め「静かで勉強するには、シカゴのような大都会よりも私共のアイオアの小規模な大学の方が良いですわ」と言うのであった。しかし私の心はすでにロンドンへ飛んでいた。彼女にはその年のクリスマスにロンドンからプレゼントとしてフロベルの小説を二冊ばかり贈った。私の帰国後もロチェスターのレディング君同様、この女性からのアメリカ便りがしばらくの間続いた。

シカゴを去る前にナイアガラの瀑布見物をしようと思い、まずデトロイトに行き、フォードの自動車工場を見学し、駅前のホテルに一泊した。このホテルはいわゆる、商人宿で、部屋もすこぶる簡素なものであった。化粧台の抽斗を開けると聖書が二冊入っていた。この事実はちよっと考えると、いかにもこの国がキリスト教の布教をねらった一策とも考えられるのであるが、実際はそうではないのである。前述したように、一九二〇年代は禁酒励行の時代で、表面的風紀の取締りの厳しかった時代であったが、キャポネの暗黒街はどこにもあり、日曜日の聖日を守る者が少なく、

ロスに滞在中出席した教会の日曜学校でも出席者が減っている現状を牧師は嘆いていた位であるから、米国としては信仰の危機にあったといえよう。その原因は第一次世界大戦の結果、米国は戦勝国となったが、欧州に遠征した兵士の人生観はもとより、日常道德の頹廃を来したことは参戦国、特に勝利の美酒に酔った国民の陥る通弊である。官能的なジャズ音楽や頹廃的文学の横溢がすべてを物語っている。シカゴの下宿で読んだトリビューン紙の報ずるところによれば「デトロイトの旅人宿では、朝、宿泊人が起きると、髭を剃った後で、抽斗の聖書の頁を引きさいて、それでレーザーの刃を拭く習慣がある」とのことであった。まさか、そんな事がと半信半疑であったが、現実にデトロイトの宿で聖書が粗略に扱われていることを知って、驚きもし、悲しかった。

デトロイトからバッファロー行の汽車に乗る時、切符売場でパスポートの提示を要求されて不思議に思ったが、それは移民法が厳重になって、中国人の出入国がうるさくなっている時だったからである。列車がカナダ領を通過する時には、禁酒法の励行はなく酒に頬をほてらした乗客がかなりいた。

バツファローに一泊したが、スツケース一個しか持たぬ日本人の一人旅と見てか、立派なホテルでは泊めてくれず、飲食店兼業の小さいホテルを紹介してくれた。一泊二弗という安い料金を前払いで宿泊した。この主人というのは昔は船乗りで神戸に行ったこともあるという話をしていた。泊る処は二階にあった。階下が食堂で、米国映画でよく見受ける店構えだった。食堂を見下しながら階段を登ると幾部屋かの寝室があった。「パン、パン」と拳銃の音でもして、変な奴に飛び込まれたらどうしようかと、先ず逃げ口を捜すために外に面した窓を開けたりした。翌朝、朝食を済ますと、ナイアガラ見物の連中が四人一組になって観光のタクシーに乗り込んで出発する。瀑布に通ずる上流をフェリーで渡って、いよいよ瀑布に接近して見物が始まる。チャールズ・ディケンズが一八四二年に米国を訪れた時の見聞録「アメリカン・ノーツ」(American Notes)の中で、この雄大なナイアガラ瀑布の轟音を「万雷の一時に落つるが如し」といった調子で形容したようだが、この莫大な落下する水量をもって発電し、米国東部諸州に電力を供給する近代設備が付近に配置されている光景はわれわれ日本人が絵画的に美しいものとして眺める華厳や

那智とは全く異なる水の怪物モンスターといった印象を私に与えた。快感どころか恐怖感であった。そこで、この見物を終えたと、早速横浜の商工実習学校の同僚だった渾大防先生への手紙に、「来て見れば大したこともナイ、ガラ」と自分の感想を書いた。ナイアガラ見物の客は随分沢山いたようだが、瀑布見物は表向きで、実はナイアガラ・ブリッジを渡ってしまえば、カナダ領だから酒は飲み放題、ホテルのヴェランダで痛飲している連中は禁酒法を嘲笑するかのようだった。

市俄古を発ち、華盛頓ワシントン、フィラデルフィアを経て紐育へ行く。華盛頓は米国の首都に相応しい美しい都市で、ホテルも次の間付きの綺麗な部屋で宿泊料もフィラデルフィアよりも遥かに安かった。街路の並木も美しく、例のポトマック河畔の桜は東京の尾崎市長時代に贈られたものであるが、立派に成長して素晴らしい景観を呈していた。ここからアレキサンドリアという小都市を経て、マウント・ヴァーノンのウォシントンが晩年を暮し、そして逝去したというその邸宅を訪れるために、バスで出かけた。小高い丘の上に立つこの邸宅は米国建国の父たる George Washington を葬るには相応しい場所である。

フィラデルフィアは米国の独立に際して「自由の鐘」が打ち鳴らされた歴史的な都市であるが、わずか一泊しただけで紐育へと急いだ。

郊外からこの紐育へ入る時、暗いトンネルのような所から抜け出て、急に中央駅の喧騒の真ただ中に飛び出した。イエロウ・キャップ（黄色いタクシー）でYMC Aにたどり着く。ここには十日間程ご厄介になった。当時日本人が幾名か宿泊していた。

紐育の加奈陀^{キヤネーディアン}太平洋汽船会社でカナダのケベックからイギリスのサウサンプトン行の乗船券を求めた。エンプレス・オヴ・スコットランド号の二等である。米国から英国へ行くために弗^{ドル}を磅^{ポンド}に替えなければならぬので、第一ナショナル・バンクへ行く。この銀行は摩天楼（スカイ・スクレイパーズ）の立ち並ぶ一角にあるビル内にあった。

いよいよ紐育を出発してケベックへ向かう。列車がカナダ領に入り、夜になると大柄な黒人のボーイが寝台車の通路を、眼をギョロつかせながら歩いているのが異様に思われた。乗客の間でフランス語が話されているのが耳に入った。

ケベックに到着すると直ぐ車でホテルへ向かった。ここで二晩泊った。ケベックはカナダの旧都で、英仏両軍がこの地で一大決戦を行った。この丘陵の古戦場にはイギリスの將軍ウルフとフランスのモントカーム將軍の記念像や当時使用された大砲が幾門か存置されている。

自分がこの地を訪れたのは初秋で、丘陵とその斜面とには秋草が咲いていた。この丘陵から、麓を流れるセントローレンス河を隔ててアメリカ合衆国の広野がたかなわり、村落の中に教会の尖塔が聳えているのが望見される。

ウルフ將軍が少数の手勢を引き具してセントローレンス河を下って来た。時あたかも月明の夜で、小舟に乗っている兵士達は暁を期しての合戦に緊張し切っていた。しかし指揮官のウルフ將軍はポケットから取り出した書物を、舷側を敲きながら静かに朗唱していた。部下の兵士達はこれを訝って、「閣下、それは何の本ですか」と尋ねた。すると將軍は「これはトマス・グレイのエレジー（挽歌）だよ。俺はこの詩人の心境を今は羨しく思っているんだ」と答え、明朝、激戦の末、立派な戦果を収め輝かしい勝利者たらしめとする栄誉の空しさを覚り自戒するのであった。

霧立ち籠めるセントローレンスの左岸の斜面を攀^よじ登り（そこにはその登攀の個所を示す白い小屋があった）、ケベックの原頭に現われ、英軍は敵陣に一斉射撃を加えた。果たせるかな、激戦となったが、その結果は英軍の勝利に終わった。この戦闘で両軍の指揮官は共に戦死した。ウルフは自軍の勝利にもかかわらず、凱旋將軍たるの夢も空しく異境の露と消えた。

この古戦場の見物を終えて、私はホテルに帰り、夕食を済まして自分の部屋でしばらく寛^{くわ}いでから、就寝前に日記を書こうと思い、机に向い、大学ノートを開いて、ペンを走らせようとした。その時、驚いたことに、ノートの表面が淡青色に、刷毛で掃いたように、薄青くなった。まるで水族館の水槽でものぞいた時の感じであった。

すると、窓外に少年の痞高い声で「オーロラ、オーロラ」と叫ぶのが聞こえて来た。

私は反射的にその窓の方へ自分の視線を投げた。空には、この世のものとも思われぬ夢幻的な色彩のふわふわした天の羽衣が浮遊していた。私はわが王朝時代の色

艶やかな垂張^{すいちよう}を連想するのであった。全く言語に絶する現象をこの眼で見た。わずかに二泊しかせぬのに何たる幸福であらう!!

カナダのこの地方では一夏に二回位出現するそうである。

「北方の光」Northern lights (Aurora borealis) と呼んでいるが、私はケベックという名前を聞く度毎に、Northern lights のことを思い出す。

(二) イギリス遊学

いよいよ北米ともお別れである。エンプレス・オヴ・スコットランド号に乗船する。

この船は第一次世界大戦の結果、独乙から分捕ったもので、わが国の東洋汽船会社の大洋丸と姉妹船、二万五千吨級の客船である。セントローレンス河を下り、海のごとき広い河口を航行するまでは波も静かだったが、いよいよ海上に出ると太平洋とは違い、その波浪はすさまじく、デッキに出ると、まるで遊動円木に乗っているように身体の平均を保つのも骨が折れた。巨大な横波を受けると、ギーと船体が

軋^{きし}む。この時、ふと新富亭の正月興行で、満員の客が興ずると、よめきを階下の部屋で聞いた時のような恐しさを感じた。それは客席が崩壊するのではないかという懸念のように、船体が真二つに折れるのではなからうかという不安であった。元来船には強い方ではなかったから、海が時化^{しけ}始めてから、自分は食堂で食事をする事ができなくなった。それで、そのつど、自分の部屋まで食事を運んで貰うことにした。船室から見えるものはただ渺茫^{びようぼう}たる海であった。ベッドに身体を横たえて、しばらく読書したり、過ぎし米国の思い出や、これからの英国での生活設計等に思いを馳せるのであった。

時化もようやくおさまり、一週間足らずの航海の終わりが近づくにつれ、船客も何とはなく気忙しく感ずるようになり、船がフランスのシェルブル港外に停泊して、フランス行きの船客を出迎えるランチに移乗させ、再び出航すると、ようやく船はイギリス海峡からサウサンプトン港に入る。下船後、直ちにロンドン行きの夜行列車に乗る。初めてのロンドン入りでもあり、学生の身分として贅沢とは思ったが一等の乗車券を買った。「No smoking」のロンパートメントで四人掛けである。

乗り込むと早速窓際の席を占めた。すると間もなく、お嬢さん連れの米国人夫妻が入って来た。この夫妻は前の席で、お嬢さんは私の隣に坐った。アメリカ人というのは生来、ざっくばらんで、直ぐ親しく話しかけて来る。打ち解けて話せる若者と見て、これからの旅行計画などを話し出した。

この夫妻はサンフランシスコで自動車の販売店を經營しているのだが、このたび、お嬢さんの結婚前にヨーロッパの各地を旅行して、種々見聞させるのだということであつた。話が弾むと、そのお父さんがビールを注文してご馳走してくれた。隣のお嬢さんもいろいろと質問して来る。その内に私の左手の指に結婚指輪を発見して、「貴君はどうして奥様を日本に残してこんな遠い所までおいでになったのですか」と叱責するような調子で尋ねられた時は、全く参ってしまった。すると、彼女のお母さんが話題を変えて、「今夜私達はホテル・サヴォイに泊ろうと思つてゐるんですが、ご一緒にどうですか?」と尋ねたので、早速、私は「実は他のホテルに予約してあるので」と言つて辞退した。というのは、米国滞在中、ホテル・サヴォイがロンドンで最高級のホテルとして有名で、軽いポケットでは到底まかないきれないこ

とは百も承知であったからだ。

ロンドンに到着して、この親子と別れてから、その後一度も逢わなかったが、別れる前に、ヨーロッパ旅行をしたらお互いに手紙でその感想を交換しよう (Compare notes) と奥さんからご希望があったので、私がクリスマス休暇に二週間程、フランス、イタリーを旅行した感想をサンフランシスコのお宅へ手紙を出したことがあった。この手紙の前置きとして、その奥さん達と別れてから、ロンドンの下町のどこかでお嬢さんをお見かけした旨を記したが、私への返事に、「実は、あの晩、ホテル・サヴォイに泊ったのですが、非常に高級過ぎて、目玉の飛び出るほど取られたので、早々にあそこを引き払って、下町の安い所へ移りました」という打明け話を書いてあったので、やはり、自分の考えた通りだったと思った。あの時変な見栄を張って「イエス」などと言って、のこのこ行って行ったら飛んだことになる所だった。私はホテル・アイヴァンホウという所へ行って泊めて貰おうと思って掛け合ったが、若い学生と見て、ロンドン大学付近の素人下宿を紹介してくれたので、ともかく、そこに落付いた。そして翌日、早速、坂田先生の友人の大島さんに紹介

して頂いたグロスター・ゲイト (Gloucester Gate) のドクター・クレイグの家を訪ねた。

クレイグ夫人は喜んで迎えてくれ、二階の一室を提供してくれた。下宿料は昼食別で週四磅であった。クレイグ夫妻はスコットランドの方で、先生は下町に診療所を持っていた。下宿人は、医師志望の二人の青年と、もう一人は正金銀行員のKであった。学生としてはロンドン大学の音声学教室に通っている自分だけだった。

毎朝、ガワー・ストリート (Gower Street) の大学の教室に通う。勉強することは全く基本的な音声学の理論と実際とである。たまたま横浜高等工業学校教授の安川数太郎先生が、当時世界的に有名なロンドン大学の統計学の権威カール・ピアソン教授について研究される傍、音声学の実習を聴講されていたため、安川教授とはお目にかかる機会が多かった。私の下宿というのは世界的に有名な動物園 (Zoo) の南門に近い閑静な処で、昔、この下宿にはキリスト教会の先覚者海老名弾正先生も下宿されたことがあるという。私の部屋からは、今述べた「ズウ」の南門が見え、最初の程は真夜中にライオンの吼える声に眠りを妨げられることもあったが、下宿

としては小綺麗な部屋で、食事の時には長方形の食卓にクレイグ夫妻が向き合って坐り、私ども下宿人は左右に居並んだ。一九二四年の英国は、クロスワード・パズルが大流行の年だったと記憶する。市民は朝から晩までこれに熱中していた。ザ・デイリー・メールという新聞の大懸賞で市民を狂奔させたのである。ご多聞にもれず、わがクレイグ家でも、ご主人のクレイグ先生が新聞を拡げて、難問の鍵を解こうと一心不乱で、時々われわれ下宿人に質問の矢を放って来る。自分は演劇や映画が好きなので、よく見物に行ったが、その時、当日売りのピット (Pit) とか、ギャラリー (Gallery) の安い座席券を買うために、開場前から列 (Queue) ^{キユウ} を造っている人達の中にクロスワード・パズルに耽っている幾人かを見かけたものである。また、この年で忘れることの出来ない事件といえば、ロンドンが二十五年振りの霧に襲われたことである。全く「視界を弁ぜず」という言葉がぴったりするひどい霧だった。ある晩、夕食を済ませて、自分の部屋に退いて読書していると、奥さんの声で、「竹内さん、まあちょっと降りて来てご覧なさい。大変な霧ですよ」と私を呼んでいる。私も何事ならんと階段を駆け下りて、ホールの所まで来ると、奥さん

が「玄関のドアを開けてご覧なさい」と言う。私はすぐにドアを開けた。すると、白い紗のヴェールがフワフワとホールの中に流れ込んで来た。私は外を眺めた。そこにはただ見透すことのできない深い霧の海があった。

翌日、大学まで行くのに非常に骨が折れた。バスの進行は遅々として牛歩のごとく、辻に点火された篝火 (beacon) で僅かに街の曲り角を知ることができた。大学に到着したが、余り広くもない教室で、教授の顔も霞んで見える。こんな濃い霧 (fog) は生まれて初めてだった。昔、成東時代に修学旅行で生徒と伊香保から榛名山に行った時、外輪山の相馬嶽そちうまがたけの頂上まで鉄鎖を頼りに登ったことがあったが、その折、降りる時になって、今までの霧がすっかり晴れ上って、裾野の方まで青々とした斜面が尾を曳いているのが見え初めた時には、眼の眩くらむ思いがして足がすぐんだことがあった。あの時、登る場合は一面の霧が固形物のように自分の身体を支えてもしてくれるかのごとき錯覚を私に与えたのであった。ロンドンの場合は氷壁ならぬ霧壁であった。

この年のもう一つの思い出は、フランスに留学しておられた横浜高等工業学校教

授の横山盛彰先生が帰朝に先立ってロンドンに立ち寄られた時、安川先生と共に同氏を迎えて楽しい二日間を過したことである。ロンドン大学の図書館前で記念撮影をしたり、市内の日本料理店で久し振りに和風料理を賞味したりした思い出も嬉しかったが、丁度その頃ウエンブレイで英連邦関係の博覧会が開催中で、これを見物に出かけた時のことである。確かベイカール（Bakerloo）でバスを待っていた。あいにく、雨が降り出した。バスが来たので横山、安川の両先生は車内に乗り込んだ。お二人は私に手招きして早く内に入り給えと促すので、内に入ろうとすると、車掌は大きな声で、「Out in the rain, sir」（雨の中にお立ち下さい）と言った。車内には未だ十分入る余地があるので、「でも、十分余地があるのではないか」と私が抗議すると、「もう定員一杯で駄目だ」と車掌が繰り返す。こうした押し問答の間に次のバス停に来ると、一人の若い男が待っていた。車掌は「Out in the rain, sir」と言う。その男はコートの襟を立ててバスの二階へ駆け上って行った。これを見て、私は赤面した。これは一本やられたと思った。そこで、自分もバスの二階に上った。見ると、驚いたことには二階の座席に膝掛をし、傘を差している乗客が幾人か

神妙に雨中の座席で辛抱していた。私は全く恐れ入った。イギリス人の遵法精神の一端をそこに見出した。また、このような立派な慣習とは逆に、法を無視する者のあることを別の機会に発見して驚いたことがある。そんなことは日本ならば別に不思議でもなんでもないことなのだが。

新しい材料と構造を紹介する建築の展示会があった時、私は長蛇の列の後方でその順番を待っていた。その時、ずっと後方にいた一人の男がその順番を無視して前方へと走り出した。すると、並んでいた人達は一斉に、その男に向かって「Shame on you!」（恥を知れ）という大音声のコーラスを浴びせた。さすがに、その男はそこに居たたまらず、コートの襟を立て、鼠のようにチヨコチヨコと雲隠れしてしまった。これは世情の面白いコントラストだと思った。

Old Vic シエークスピア という沙翁劇を専門に上演する劇場では何度か沙翁劇を見物したが、クリスマス・シーズンには、ドルーリー・レイン (Drury Lane) というロンドンでも一番大きな小屋で芝居見物をしたことがあった。クロウクルーム (Cloak-room) に外套を預け、プログラムを買って、いよいよ客席に就こうとする時、そのプロに次

のような面白い記事があるのを発見した。それは、あるイギリスの紳士がアメリカから来たお客様を招待して、この劇場に來た時、「この劇場はなんと言っても英国きつての大劇場で、二階のこの客席（恐らく dress circle という一等席）から舞台までは、貴君が卵をお投げになっても届かない位に遠いんです」と誇らしげに語ると、件くだんの米國紳士は黙っていない。直に次のような言葉で応酬した。「米國の劇場にはこれ以上広いのがありましてね、二階の客席から卵を舞台に向けて投げたら、途中で雛にかえるでしょうよ」と。

ロンドンで観た沙翁劇の中で、ちょっと興味をもったのは米國から來ていた当時映画俳優として日本でもお馴染みだったジョン・バリモア (John Barrymore) の「ハムレット」であった。勿論、本場の劇評家の中にはかなり厳しい批評もあったが、とにかく、めずらしい出演で人氣は上々だった。

人氣上々と言え、自分がロンドンへ来る前から長期興行を続けているバーナー・ド・ショウの「セント・ジョーン」(St. Joan)では、あの三時間という長丁場で観客を飽かせず演出することは並大抵な苦勞ではなく、俳優の熱演が何と言ってもこ

の興行を成功させたのだと思う。ともあれ、あのジョーンを裁く場面での長科白せりふはシヨウの宗教観を述べたもので、観る芝居というよりも考える芝居という近代劇の一傾向を示したものである。ウィリアム・アーチャー (William Archer) がロンドンにイプセン劇を紹介するのに十年掛りだったことを思うと、英国人もさすがにこの偉大な作家の禅僧的皮肉にもかかわらず歓迎したのも、偽善的なヴィクトリア時代の社会劇から脱皮した新しい時代を物語るものである。フランスにおいて神格化されているこのジャンヌ・ダルク (Joan of Arc) (Jeanne d'Arc) はミューズ河沿いのドムレミー (Domremy) という村の農夫ジャーク・ダルクの無学な娘であった。彼女の使命はチャールズ七世の御代にオルレアンの包囲を解き、ランス (Rheims) においてその国王の即位式を行うことであり、これらの目的を果たして郷里に帰ろうとしたが、バーガンディの人達に捕えられて英軍に引き渡される。そして宗教裁判にかけられ、魔女として死罪を宣せられ、遂にルーアン (Rouen) で焚刑に処せられた。この救国の処女は1920年に聖列に加えられた。この主人公ジャンヌは独乙詩人シラーの悲劇の主人公「ラ・プセル」 (La Pucelle)

として知られ、イギリスの詩人サウジー (Southey) もこれを詩に書いている。沙翁の国史劇「ヘンリ六世」第一部でもラ・プセルの活躍が描かれており、その取扱いはショウの場合と比較して興味がある。沙翁の芝居では飽くまでも敵軍の小憎らしい奴として描かれているが、どこことなく戯画化されて、魔女というよりも妖精の如き印象を与える。私は英軍の勇将タルボットとラ・プセルとの対照は戦場のすさまじい場面における巧妙なリリーフ (relief) として沙翁の作劇術の非凡さを示したものだと思う。

1923年には、近代劇に新風を吹き込んだショーやゴールズワージーの社会問題を取扱った演劇の他にモームの如き中堅作家の作品がライトを浴びるようになったが、私はたまたまノーエル・カワード (Noel Coward) という若い劇作家が自ら舞台に起って自作の「渦巻」 (Vortex) 中の青年を演ずるのを観たことがある。子供の頃から舞台に立っているので舞台度胸も良く、作劇術に非凡なものがあることを知った。果たせる哉、彼もモームに劣らぬ人気作家となった。彼の最も評判を取った「キャヴァルケード」 (騎兵隊) という芝居は、イギリス上流階級の主人公夫

妻と、かつてそこで働いていた下男とその家族との親子二代にわたる関係を、十九世紀末のボーア戦争から二十世紀の第一次、第二次世界大戦に至る長い期間における社会の変動を背景として、その主従関係の推移を描いた俗受けのするお芝居であるが、舞台の掛け引きが上手で、英国は勿論、米国でも人気を拍した。しかし所詮は巧妙な作品、時代の好尚に即応したナショナリズムであり、センチメンタリズムであって、不朽の傑作などとは言えない。

このキャヴァルケードの中に新婚夫婦が大西洋上での遭難の話が出て来る。こうした海難事件はアイルランドで生れ、英国で活躍したジョン・アーヴィン (Irvine) 作の「船」で、従来タービンを使用していた造船技師の息子が電力による船を開発して、その試運転で大西洋へ処女航海に乗り出したが遭難するという悲劇の結末と類似点があるが、このエピソードは、1915年大西洋上で氷山と衝突して沈没、多数の犠牲者を出した例のタイタニック号の事件からヒントを得たものであろう。自分は米国に滞在中、ボストンに行った時、ハーヴァード大学を訪れ、同大学の立派な図書館を参観した折、このタイタニックの遭難による犠牲者の一人にこの大学

の学生がいたが、彼は休暇中英国へ旅行し、その帰途、処女航海のタイタニックに乗って遭難した。この青年の母親は息子の尊き犠牲を記念するために、若い人々が是非利用してくれるようにと、八百万弗を大学に寄付して、この図書館が出来たのだという話を聞いて非常に感激した。私は上記の「船」や「キャヴァルケード」を読んだ時、このタイタニックの遭難を想起した。

(三) 仏・伊への旅

クリスマスとか正月の休みは、その土地に懇意な知人なり、縁者のない留学生にとっては、とても佗しいものである。自分としては、折角歐洲まで来たのだから、フランスやイタリーの名勝を探ねたいと思ひ立って、早速、「トマス・クック」の旅行案内所へ出かけて、二週間位の予定でその旅行のプランをたてて貰った。

第一日、ロンドンのウォーターloo駅からフォークストン行の列車に乗る。簡単な朝食の用意がしてあった。それを済ます頃、列車は薄汚れた家並みの近郊を通過して、南部イングランドの閑静な自然の中を走る。二時間程でフォークストン

に着く。そこからフェリーで英国海峡を渡り、フランスのブローニュ港に入り、上陸してパリ行の列車に乗り込む。入国の手続きは簡単だった。

フランスのこの辺の自然は坦々たる平野で、冬枯れの一色というか、イギリスのケント州に見る柔らかさではなく、何となく厳しさがあるように思われた。パリに着くとコンコルドに近い指定のホテルに入る。一泊して、翌朝、ガイドが車で迎えに来る。確か「北駅」だったと思う。予定の列車に乗ると、北進すること二時間足らずで、例の有名なヒンデンブルグ戦線に到着、同行の観光客数名と共に戦場を巡る。砲弾の炸裂した跡がまだ生々しかった。上陸早々、遙々米国から来た派遣隊が、独軍の猛烈な攻撃に逢って、その散兵線が無惨にも寸断され、敵の好餌となった敗戦の跡が痛ましかった。米軍はフィリピンにおける米西戦争以来、ほとんど実戦の経験がなく、大体、連合軍の勝利がほぼ確実となった頃、応援に駆り出された若い兵士達から編成されていたので、この哀れな敗北となったのだとガイドは説明していた。その哀れな戦死者の白い十字架の墓標のみが庭園に咲く白い同数の花のようだった。

前述したジャンヌ・ダルクがオルレアンの包囲を解き、1492年に、チャールズ七世を即位させた。このランスは独軍の砲火によって破壊され、見る影もない有様となっていたが、この地は有名な酒（特にシャンパン）の醸造地というので、かねて目星をつけていた独軍部隊がこの市に雪崩れ込んで、地下室の酒樽に殺到したとの話であったが、世界的に有名なランスの大聖堂もまた独軍の砲火のために破壊されていた。そしてジャンヌ・ダルクの騎馬姿の銅像がその前に独り淋しく立っていた。

その翌日、ナポレオンが愛好した離宮のあるフォンテンブロー（パリの南西三十哩、セーヌ河の左岸に近い）へ行った。トマス・クックの観光客数名と、同じ車でホテルを出た。途中、坦々たる真直ぐの路に出た。ここは1900年にパリでオリンピックが開催されたとき、マラソンコースとして使用されたそうだ。私共は二十四年振りに、そのコースを車で走っていた訳である。路傍の並木には寄生木やどりぎがかかっていた。これを見ると、ガイドは、「ここを通るときは、御婦人は注意して下さい」といって笑った。それはクリスマスMASの季節に寄生木のかかっている木の下に

御婦人が立っていたら、誰でも接吻してよいという慣習があるからでした。

その後、ある英字新聞の「親父教育」という漫画で、クリスマスのシーズンに、一人の若い女性が列車で旅行中、彼女の上の網棚には、カバンが一個のせてある。

そして、それに彼女の名前のイニシアル、D・Oという文字が見え、その網棚からミッストウ寄生木がぶらさがっている図が描かれていた。

さて、フォンテンブローの森の付近にはバルビゾンという村がある。この村には、「晩鐘」とか「落穂拾い」という名画で知られているミレーをはじめ、近代のフランスで著名な芸術家達が住んでいた。またイギリスの文豪オスカー・ワイルドも住んでいたそうである。彼は「ウィンダム夫人の扇」とか、聖書から取材した「サロメ」というドラマを書いて有名ですが、特に、「サロメ」は元フランス語で書かれたもので、名女優サラ・ベルナールがサロメを演じて好評を博した。わが国では松井須磨子がサロメ、沢田正二郎が予言者ヨハネという配役で評判をとった。私もこの芝居を横浜で観たことがある。

さて、フォンテンブロー宮殿では丁度「ナポレオン一代記」という映画のロケ中

だった。

ところで、この離宮で皇帝ナポレオンは、王妃ジョセフィンと最後の幾日かを共に暮した。ジョセフィンは、ここからマル・メイゾン（パリの西約七哩のところにある彼女の居城）に立ち戻ったとき、皇帝から正式の離婚状が届けられていた。彼女がフォンテンブローからの帰途、乗った馬車はオパールの車と称して不吉なものとしてされている。

慌しいパリ滞在を終わり、夜行列車でイタリィに向う。この列車を待つ間、駅の階上にあるレストランで夕食をとる。自分の前の席にオックスフォード出身という一人の紳士が腰を下した。「これからスイスヘスキーに出かける」とのことであった。食事を済ませて、この紳士と別れ、いよいよ列車に乗り込む。

ミラノに着いたのは何時頃だったろうか。駅前で辻馬車に乗る。馭者にホテルの名前を告げて、ゴロゴロと車輪の音が数回響いたと思ったら、馬車はホテルの玄関前に停止した。「これは飛んだ失敗だった」と内心思った。その瞬間、落語の「代わり目」という噺を思い出していた。

自分から進んで乗った馬車だから、たとえ「ゴロゴロ」と数回車輪が回転したただけでも請求された代金は払わなければならない。まるで狐につままれた気持ちでホテルの玄関に入ると、ボーイが私のスーツケースを持って二階へと先に階段を昇って行き、部屋の扉を開き、荷物を置いて、私を待っていた。

さて、心付けはどの位と考える間もなく、私はポケットから、当時日本では最少の二十銭札に似た玩具みたいな二十リラの札を取り出して彼に手渡すと、「コンビヤン、コンビヤン」と震える手で受取る。まだ年少なボーイの顔は紅潮していた。咄嗟に、イタリーのリラの相場はどの位なのかしらと不安になった。旅装を解き、入浴後、食堂へ行って晚餐をとった。食事を終わってテーブルに十リラの銀貨を置いた。これを見ると給仕人は私に向って最敬礼した。部屋に戻って、私は「あのチップではまだやり過ぎかな」と思った。

翌朝、朝食の時にはチップを半減して五リラにした。しかし給仕人の態度は相変わらず鄭重そのものだった。ミラノ市内見物では有名な大聖堂（ディユオモ）が印象的であった。当時イタリー映画といえはミラノの撮影所が有名だったが、その見学は

できなかった。

次はアドリア海に臨むヴェニスへ行く。汽車を降りて海岸から例のゴンドラでホテルに向う。舟で旅館に送られるのは悠長なものだ。それにしても真昼のゴンドラは風情に乏しい。わが国の大川筋の渡し舟は極めて風流で、真夏などの船頭はねじり鉢巻に片肌脱ぎというイナセなものだが、お客の方は男なら扇子を使い、女は日傘をさすといった有様、これも落語の「船徳」のような滑稽味があるというか、江戸名所図絵の名残りというところである。これも現代版ともなれば、さしづめ「矢切りの渡し」というところであろう。

ヴェニスのゴンドラも名月の夜こそ最もロマンティックと言うべきである。ホテルの「ルナ」に落ち付く。「ルナ」とは良い名前だ。昼のゴンドラの埋め合せであろうか。

夕食の時はチップの相場を下げて2リラにした。しかし給仕人の態度は実に慇懃であった。翌朝、私がちよつと寝坊して食堂に出るのが遅れたら、わざわざ給仕人が部屋まで私を起こしに来てくれた。

ヴェニスには伊太利有数の観光地で、世界各国からの旅行者が多いが、イギリス文学とは縁ゆかりの地であり、特にブラウニング夫人は、結婚（1846年）後、専ら伊太利に居住して、夫君と共に詩作に耽ったことは有名である。1929年に上梓されたカロラ・レナント夫人による「バーレット嬢の駈け落ち事件」というのは詩人ロバート・ブラウニングとのロマンスを題材としたものである。

サン・マルコの広場は余りにも有名であり、映画のロケにも随分利用されているが、沙翁の「ヴェニスの商人」については今更語るまでもない。

ヴェニスの落日は絵画的である。列車がこの浮き城の如き都を後に走り去る時には、一抹の悲哀を覚える。

「ローマの休日」という映画があつたが、ローマは古来歴史的に見て世界で最も著名な所であり、特にカトリックの本山たるヴァチカン宮殿を中心として、短時間では到底見物できぬ程史蹟が豊富である。しかし、ガイドの案内で効率的に見物することができた。サン・ピエトロの大伽藍の大きな皮の扉が二十年振りに開かれるとあって、参拝者が頗る多く、自分もその幸運に浴して、その扉から入ることがで

きた。伝うるところによると、この大扉が開かれる時に、これを潜る者は罪障消滅するとか。全く偶然とはいえ私は有難かった。ラファエルのお師匠だったブラマンテの設計になるサン・ピエトロの大聖堂は百数十年の日子を費して建設され、その荘大なること類を見ぬ程であるが、前庭にあるパウロやペテロの立像が象徴するようにキリスト教の地盤の堅牢さを物語っている。

十万人の観衆を収容出来るコロシウムはその巨大さを誇るものであるが、この円形大演技場は、如何に多量のキリスト教徒の血を流したことか。「ローマは一日にして成らず」というこの雄大なる都には世界に通ずる道があった。暴君ネロによって虐げられた市民の反発は、一面、中世の禁欲主義で抑圧された起爆剤の点火によって破裂し、自由の風に吹き飛ばされた浪漫主義の種子がやがて開花するのである。わが国では「日光を見ぬうちは結構とは言うな」という諺があるが、それに相当するのが「ナポリを見てから死ね」(See Naples and die)^{ネイプルズ}である。そのナポリへやって来た。途中はローマ街道沿いにある水道(aqueduct)^{アクイダクト}の名残りや、葡萄園等を車窓から眺める程度で、別に眼を楽しませるものもなかったように思ったが、ナ

ポリに来ると、前方に海、背後にヴェスビオの火山を控えて、明るい雄大な景色が展開している。旅宿はコンチネタルというナポリ湾に臨む素晴らしいホテルで、部屋のテラスから眺めると、その昔牢獄に使用されたという古い城廓のごとき建物が聳えていた。

大食堂の真中で、外国からのツーリスツの視線を一身に蒐めて、ナイフとフォークを動かす一人の日本青年を想像して見給え。

食事が終わった頃、ガイドが来て「翌日の観光ルートで、ヴェスビオ登山に特別の案内をするが、備っては貰えまいか」としきりに口説いたが、「自分は登山鉄道で行く」と言って断った。成程、ヴェスビオも麓から徒歩で登るのが本当ではあろうが、時間の余裕もないので、断念した訳である。

西歴79年、この山の噴火で埋没したポンペイの遺跡見物は私に種々な感想をもたらしたのであるが、発掘品により、かなり進んだ文化的生活様式が窺われると同時に、壁画等から墮落の風潮が察知される。円形劇場 (Amphitheatre) の跡は当時の演劇の隆盛を物語るもので、ローマのコロシウム (Colosseum) と比較して、そ

の構造の変遷を知ることができて面白い。「ポンペイ最後の日」(The Last Days of Pompei)はリットン卿の作で、1834年に上梓され、映画にもなって好評を博した。このリットン卿のお孫さんが満洲事変後、国連から派遣された調査団の団長だったことはご記憶の方もあるであらう。

ナポリへの旅も終り、ローマに戻り、それから北上してフィレンツェを訪ねた。

この都はわが京都に似た山紫水明の地で、アルノー河畔に佇むと、天才レオナルドの昔が偲ばれ、比叡にも擬すべき山道を登ればフランシスカンの僧院に達する。また市内を歩めば、「神曲」の作者ダンテが腰を下した憩いの場所もある。それだけに感傷的な霧に包まれて、自分の記憶は一層模糊となる。いよいよ伊太利の旅行も終りに近付き、ローマから夜行列車でパリへ行く。途中の駅で弁当を買う。その弁当の袋の隅に瓶が一本入っていた。一合入り位の葡萄酒の瓶である。早速弁当を開いて、葡萄酒をラッパ飲みする。空き腹に飲んだので、ちょっと顔がほてり、酔心地となった。しばらくすると喉が渴き、何か軽い食物を注文して水を飲もうと思い食堂車へ行った。「水をくれ給え」と給仕に注文すると、小瓶を一本持って来た。

私が怪訝けげんな顔をしてそれを取り上げると、給仕は「ア、ク、ア、です」と言う。水 (acqua) のことである。

この瓶詰のアクアは先程飲んだブドー酒一瓶よりも高価であることを知って、驚いた。矢張、これもブドー酒の国だなと思った。

パリからロンドンへの帰路は、パリ、カレー間は汽車、カレー、ドウヴァ間はフェリー、そして最後は、そこからウオータールーの終着駅へというコースであった。クリスマス休暇が明けると、残された学期は瞬く間に終り、復活祭の休日が巡って来た。帰国前に湖畔地方への旅に出た。

第一日をウインダムニア湖畔の宿で過ごした。春尚浅い北国の夜は薄ら寒く、宿の女中が湯たんぽ代わりに熱湯を瓶に入れ、布に包んで持ってきてくれた時は微笑を禁じ得なかった。昼間湖水の全景を眺めようと裏山に登った時、近所に住んでいるらしい人が犬を連れて、その坂道を登って来たので、しばらく彼と会話を交えた。坂を登りつめた所に説教用の台が一つ置かれていた。私はその台の前に佇んで暫時黙禱した。こうした衝動は先程の村人から、ウインダムニア (Windermere) 湖に纏まつわる

エピソードを聞いたためであつたらしい。話によると、これはワーズワースの詩にも散見するところだが、天気晴朗の時は全く鏡の如く平静な湖面が、一度天候が急変すると、疾風が湖面を払って怒濤が逆巻き、不慮の惨事が勃発するとのことであつた。つい先日にも結婚式で花嫁の一行が対岸の智殿の家へ赴かんとした折、空模様が急変して、風浪のために船が転覆、一行が湖に呑み込まれるという悲劇があつたとのことである。その後、私が帰国してから間もなく「マンチェスター・ガーディアン」紙の主筆が同じような事故で亡くなったという記事を読み、上記の因縁話を思い出した。

ワーズワースが住んでいたという「ダヴ・カッテージ」を訪ねる。この家の裏庭に数本の黄水仙を発見した。あの有名な「ダフォディルズ」(daffodils)の詩を思い浮かべた。「たちまちに、群がる金色のラッパズイセンが眼に入った。湖のほとり、樹々の下に、微風にはためき、おどっているその大群が」。この自然詩人の眼を驚かせたラッパズイセンの群落はグラスミア付近の何処かだったのであろう。

ワーズワースが晩年を送った「ライダル・マウント」等を巡って、帰路サー・ウ

オルター・スコットの小説で有名な「ケニルワース」(Kenilworth)に一泊した。

この地はエリザベス女王が四回程行幸遊ばされた所であるが、女王の寵臣の一人、レスター伯がデヴオンの貴族ヒュー・ロブサート卿の息女で美人の聞こえ高きエーミー・ロブサートをその愛人エドマンド・トレスリアンの手から奪って、オックスフォードに程近い「カムナー」館に幽閉して腹臣のリチャード・ヴァーナーに監視させていたが、女王のもう一人の寵臣で政敵であるサセックス伯に忠誠を誓う前記トレスリアンがレスター伯の秘密結婚を暴露せんと懸命に働く。一方その主君の秘密を守らんとして、ヴァーナーがエーミーを自分の妻と称して1575年行幸の際、女王の手前を取り繕わんとする。そしてこれに抗議するエーミーは遂に殺される破目になるという悲劇である。このロマンスの中にはサー・ウォルター・ローリーや詩人シェークスピアが登場する。前者の登場は結構として、シェークスピアが出て来るのは全く時代錯誤である。と言うのはシェークスピアはまだストラッドフォードでグラマー・スクールの生徒、年齢もやっと十一歳だったからである。

ロンドン大学に留学中、最もご指導を頂いたのはミス・ホールドワースであった。

先生は教室での授業は勿論、宿題などの訂正にも懇切を極め、発音の实地指導においては素晴らしい才能を持っておられた。その優雅な発音は南部イングランドの典型的なものであった。わが秩父宮殿下がオックスフォード大学ご留学に際し、このミス・ホールドワースが殿下の発音指導教官に選ばれたことを新聞紙上で知り私は非常に嬉しかった。

また、ロンドン滞在中、下宿したクレイグ家の皆さんの御親切に対して忘れ得ぬ数々の思い出があるが、特にミセス・クレイグから母親のような慈愛と激励とを賜わったことは終生忘却出来ない。

四 帰 国

リヴァプールに近いパークンヘッドから、いよいよ、帰国のために乗船する。英国の汽船会社、「バターフィールド・アンド・スワイヤ」(Butterfield & Swire)のつまり、ザ・ブルー・ファンネル・ライン(青筒船と俗にいう)のピラス号であった。船客は僅か六名、所謂、カーゴ・ボート(荷物船)だった。船賃は僅か七十

五磅位だった。神戸へ着くまでに、途中、荷物の積み下しがあるので四十二日、約一ヶ月半の航海だった。その間寄港して見物出来る個所もあるので旅の徒然つれづれを紛らすこともできるが、漫然と海の青ばかり眺める訳にもゆかず、バーナード・シヨウの演劇作品の普及版を二十冊ばかり買い込んで、甲板椅子デツキに身体を横たえて読書三昧に耽ろうと考えた。四十二日の長い船旅について一々見聞したことを記す必要もあるまい。

ブルー・ファンネルの汽船名はギリシャ神話の英雄の名をとったものが多い。私共の船のピラス(Pyrhus)もその一つで、あの勇将アキレスの息子である。シェークスピアの「ハムレット」では第二幕第二場に「ピラス」の名がしばしば出て来る。「荒武者ピラスが猛虎の如く」などの科白がそうである。

船が西班牙のビスケイ湾沖を通過した時は、かなり海が時化しけて、朝、キャビンに運ばれた珈琲カップがテーブルから床に転落する物音に眼を醒まされたほどであった。

ジブラルタルを通過して、地中海に入ると、アフリカ大陸が遠望され、東進する

のだが、波は静かに、女性的な表情を呈しているが、船員の話によると、その菩薩像が天候の激変で夜叉の如く荒れ狂うことがあるという。つまり油断ならぬ海 (treacherous sea) とのことだ。

キプロス島を左に見て、船はポートサイドに向かい、いよいよスウェズ運河を通過することになる。ピラス号が運河に入らんとした時、船長のところに無電が入った。それは「ジェダー港の沖においてマレイの難民を収容せよ」という命令であった。難民というのは、マレーシアから回教の大本山メッカへ巡礼旅行に出かけた多数のマレイ人が巡礼の帰途、アラブとトルコ軍との戦争の渦中に巻き込まれ、右往左往することになり、英国政府に救助を乞うという結果になった。

船がジェダー港の沖に達した時、私はアラビヤの灼熱の砂漠で交戦する両軍の砲弾が炸裂するのを見た。殷々たる砲声が無気味だった。こうした風景の中で、ジェダーの港から大きな帆を張ったジャンクが難民を満載して本船を目指し、次から次とやって来た。

ピラス号は無事、これらの難民を収容して、紅海を南下、遂に印度洋に出た。

懸念された印度洋上の航海は極めて平穩で大助かりだった。そして次はマレイのペナン港に投錨した。この地方の自然には東洋の特徴が顯著である。山麓に竹林が鬱蒼と繁茂し、細流がその間に微かな音を立てて流れている風情は郷土の漸く近くなったことを思わせる。中国風の美しい寺院が小高い丘の上に見えた。珍らしさに惹かれて、山門を潜る。和尚が出迎えてくれ、いよいよ会話の段になると、英語が通じないので、中学時代に習った漢文で筆談をした。「遙々日本の青年が来てくれたことを心から歓迎する」という挨拶で、その歓迎の辞の最後に唯一つ述べた英語は「コントリビューション」(Contribution)、つまり寄付という言葉であった。それで結局私は五弗を取られてしまった。

シンガポールで荷役に二日を要した。その間に植物園、浄水場等の見物をした。タクシーを半日傭ったが、僅か五弗だった。運転手も一日五弗稼ぐと、一日、二日は遊んで暮らせるようなことを言っていた。

シンガポールを出港すると、もうどこにも寄らずに神戸へ直行する。マラッカ海峡を通過した時、ピラス号の船長は、この長途の航海において、途中出逢う船舶の

多くが「ユーニョン・ジャック」を翻しているのを見て、大英帝国が七ツの海を支配していることを誇っていたことや、あの海峡を通過した時、実に美しい南十字星が夜空に輝いているのを眺めた歓喜と暗黒の海中にこの身が引き込まれはせぬかという不安とが交錯した体験から、この魔性の海と呼ばれるマラッカ海峡が、その後わがデ杯選手として活躍が期待された佐藤君の尊い一命を奪ったことを知った時、私はふと頼山陽の「泊天草洋」という漢詩、「雲耶山耶吳耶越。水天髣髴青一髮。」を思い浮かべるのだった。シンガポールで他の船客は全部下りてしまい、神戸に着いた時は、客は私唯一人となった。四十二日の航海で船長はじめ、事務長やドクターとも懇意になり、食事の時はずっとより、甲板に出ても、何かとこの日本青年の旅情を慰めてくれた。特に初老のドクターは種々と自分の経験を話してくれた。ロンドンの書店で購入したショーのドラマも印度洋を越えるまでには全部読了して、いささかショーのファンになったようである。短い外遊だったが、自分の英語教師としての再出発には大部役に立った。幸い、かつて教鞭をとった神奈川県立商工実習学校には、自分の崇拜する煙洲先生が校長を兼任しておられ、主事の山本先生、教

務の増田先生等の皆さんが私の着任を待っていて下さるとの報もあったので、勇躍神戸に上陸した。

波止場には兄夫婦が出迎えに来てくれた。海外で種々厄介になったので、早速、三井物産の神戸支店に挨拶に行く。兄の友人、小野さんに逢う。同氏は神中の一年先輩でもあり、ご令兄は寿小学校時代、兄の友人でもあった。ご尊父は寿小学校の校長で、確か神中での筆者の同窓武林君のご尊父の前任者だったと思う。

欧州三人旅（その一）

昭和四十八年七月二十九日（日曜）雨。

午前十一時羽田発、モスクワ經由、JAL 443便で空路ロンドンへ向う。

空港には、神奈川県立外語短大から学長、管理課長、教務課長等の顔も見え、また、お琴の関係では、東京から安藤、高野の両先生、横浜からは家内のお弟子さん多数のお見送りがあり、また、家元の中田博之先生にまで馳せ参じて頂き、真に盛大な出発となった。

予定の時間を少々遅れて出発。機は北に向う。しばらくして、日本海の上空を越え、やがて、ソ連領に入る。一万米の高度からエニセイ、オブ等の大河を瞰下し、九時間半の後、モスクワ空港に到着。

広々とした空港の外縁には風にそよぐ白樺の並木が、芝居の書割かきわりのような遠景となり、その前景では空港勤務のロシア婦人のカラフルな服装と、係官の軍隊式なキビキビとした動作とが印象的であった。

約一時間の休憩中に、給油と整備が終り、機は再び飛び立ち、しばらくして、独

逸のハンブルグ上空を通過、遂にテムズの流域に沿って飛行、英国時間で午後二時五十分ヒースロウ空港に到着。

通関手続きも極めて簡単に済み、数個の荷物を手押し車でタクシー乗場まで運び、そこからグロヴナー・スクウェアのホテル・ユーロッパへ行く。

フロントでの手続きを済ませ、ポーターに部屋まで荷物を運んで貰う。

真夏の太陽は未だ高く、カン／＼と照っていた。外出する気力もなく、ベッドの上で寝ころんで休息する。夕食後、入浴、早々に就眠。

七月三十日（月曜）晴。

昨日の疲労にも拘らず、今朝は七時起床、朝食後、九時半には外出。ホテルから歩いて数分のブリティシ・カウンシルを訪ねた。

ミセス・ミッチェルという初老の婦人が応対してくれ、ステイト・ハウスのグリーン氏と、ミス・マルコットに電話で、明日午後二時と三時とに夫々面談出来るように取り計って貰う。

用事が済むと、応接間に待たせていた家内と恵美子を伴って、オックスフォード・

ストリートに出て、ぶら／＼とショウ・ウインドウをのぞきながら散歩した後、クオンティティ・インという料理店で昼食をとる。

食後、再びオックスフォード・ストリートからリージェント・パークへ行き、緑したたる公園内を散歩してからホテルに戻った。

七月三十一日（火曜）晴。

朝食後、ラッセル・スクウェアへ行き、市内観光のバスに乗る。

ナショナル・ギャラリー、トラファルガー・スクウェアを過ぎ、テムズのヴィクトリア・エンバנקメントを通過。ビッグ・ベンの大時計を仰ぎ見る。ウエストミンスター・国会議事堂の横を過ぎ、ランベス橋を渡る。

テムズの右岸に出て、バスを降り、テムズを背景に写真を撮る。再びバスでウエストミンスター・アペイに行き、英国の著名な詩人の墓と記念碑のあるポエツ・コーナーをはじめ歴史的記念の場所を見物。次に、バキングム宮殿前で衛兵の交代を観る。

市内観光を終り、正午ちょっと過ぎ、ラッセル・スクウェアで解散。付近のスペ

イン料理店で昼食をとり、地下鉄でハウボンまで行き、家内と恵美子にはT書店の前で午後三時頃に落合うことにして、自分は、ステート・ハウスに赴き、昨日約束しておいたグリーン氏と先ず面談。同氏は教授法に関する有益な示唆（サジェスチョン）と共に必読の参考書をリスト・アップしてくれ、ロンドン大学付近のディロン書店で、それ等を購入するように勧めてくれた。次に面会したミス・マルコットからは地方大学（プロヴィンシアル・ユニヴァシティ）に関する種々な参考資料を頂戴した。

それから家内達と落合い、ディロン書店へ行き、数冊の参考書を選定し、そこから日本の自宅へ郵送して貰うことにした。

帰途、インド料理店で軽い食事をする。ホテルに戻り、入浴後、英国観光宣伝のテレビを観た。

八月一日（水曜）晴、午後雷雨。

ホテルの玄関前からタクシーでロンドン塔へ行き、塔内を見学。武器の展示品も珍らしかったが、何と云っても、戴冠式に着用する王冠が素晴らしかった。

この見学を終ってから、タクシーで、ラッセル・スクウェアのエヴァンズ・アンド・エヴァンズの観光バス発着所へ行き、ウインザーとハンプトン・コート観光の切符を買う。

この発着所隣のレストランで簡単な昼食をとり、バスに乗り込む。

ウインザーに到着。バスを降り、お城へ通ずるゆるやかな坂の登り口で、先ず、ヴィクトリア女王の銅像が眼に入る。

お城から見下ろすイートン校の眺望は美しい。国王や貴族達の肖像画が展示されている部屋での案内人の説明に、イギリスの歴史が絵巻物のように自分の脳裏に繰り広げられる。

帰途、ハンプトン・コートを見物。カーディナル大司教ウールジの豪華な往時の生活が偲ばれた。

ラッセル・スクウェアに戻り、タクシーを拾った瞬間、沛然たる雷雨となった。入浴後、ホテルで夕食をとる。

八月三日（金曜）曇、時々小雨。

今朝はロンドンを発つので、六時前に起床。午前九時五分パディントン発の列車で、先ず、オックスフォードへ行き、それからストラットフォード・アポン・エーヴォンへ向う。

オックスフォードまでは、コンパートメントの一等車で、座席は空いていた。目的地に着くと、早速、タクシーで、雨中の市内見物。古色蒼然たる学寮と、科学研究室や、図書閲覧室等が、新旧建築のコントラストをなしている。

市内見物の後、駅構内のビュッフェで、サンドウィッチと紅茶、（家内と恵美子は珈琲）で軽い昼食を済ます。

十二時十分の列車に乗る。一等車でも、ロウカルなので、十分空席はあるが、甚だお粗末なものだった。

ストラットフォードに着いたが、生憎、定期のバスもタクシーも無いので、ちよつと面喰つたが、たまたま来合わせた小型バスに便乗して、ヘイター・ホテルへ行く。白髪頭のマネジャーが、先ず、私達を食堂と応接間へ案内し、それから美しい庭園に出て、白いコテージの方が私共夫婦のため、その隣の小さいのが恵美子の泊

るところだと告げた。

夕食後、シェークスピア記念劇場の観劇券を予約して貰う。席はストールで、一人二磅四十片^{ペンス}。演目は「恋の無駄骨折り」(Love's Labour's Lost)。斬新な演出で、全員の呼吸がびったりと合って、なかなか好演だった。

送り迎えのタクシー運転手は若い女性で、料金は七十片だったが、三十片のチップを与えた。

今夜は馬鹿に冷え込む。

八月四日(土曜)曇後雨。

午前八時モーニング・ティー。九時朝食。

庭の美しい芝生には、バラ、コスモス、それに、スウィートピーが咲き乱れていた。

アヴェニュー・ロウドを下って、郵便局へ行き、買物を小包にして郵送する。

「ニュー・プレイス」を見物した後に昼食。已に午後二時頃だった。エーヴォン河畔のバス停で、偶然、外語短大の堀江芳子先生に出逢った。昨晩は、お友達の紹

介で、このバス停前の The Red Horse というホテルに一泊し、今夜はロイヤル・シェークスピア・シアターで観劇の予定だとのこと。堀江先生とは、そこでお別れして、バスで、アン・ハザウェイ（シェークスピアの妻）の家を見物に行く。バスの料金は、一人八片。

折悪しく雨が降り出したが、帰りのバスを待っているとき、丁度、来合わせたタクシーを拾い、シェークスピアの生家に向う。タクシーを待たせておいてのあわただしい見物だった。

それから、インフオーメーション・センターから電話で、明日の列車を問い合わせたところ、明日は日曜で列車は一本もないとのこと、ここからバーミンガムまではタクシー、それから、列車でウインダムアの十哩程手前の駅まで行き、そこからバスまたはタクシーを利用せねばならぬとのこと、ちょっと不安だったが、まあ、冒険を覚悟でそうすることにした。

八月五日（日曜）曇。

午前八時、モーニング・ティー。九時半までに朝食を済ませ、タクシーでバーミ

ンガムへ行く、行程二十五哩、料金四磅五十片、チップは五十片。

バーミンガム駅で切符を買う。十二時十五分発の列車はウインダムニアまでは行かない。クルーとプレストンで乗り換え、オクスンホウムで下車、タクシーで目的地のウインダムニアへ行く。途中、事故で列車が非常に遅れ、オクスンホウムに着いたのが午後八時過ぎだった。駅前でタクシーを雇い、ウインダムニアのビーチ・ホテルへ行く。

前記クルーで乗り換えたとき、家内と恵美子は、やっと座席を見付けたが、自分は暫く通路に起っていないければならなかった。すると、一人の婦人が「隣の座席はリザーヴになっていきますのでプレストンまでは空いているでしょうから、その席に坐るように」と勧めてくれたので、彼女の隣の席に腰を下した。この婦人の話によると、ヨークシャーの人で、御主人は船員で、横浜や長崎へも行ったことがあるとのことでした。

プレストンで乗り換えたとき、やっと三人一緒に席がとれた。隣の座席には三人の若い娘達がいた。その中の一人はソマセットからアルバイトでグラスゴウの病院

へ行くのだと言っていた。皆素朴な娘達だった。

オクسنハウムからウインダムアのホテルに着いたのは午後九時過ぎだった。

今は観光シーズンだからでもあるが、どのホテルも満員だった。ロンドンをはじめ、どこにも民宿が沢山ある。ストラットフォードで泊った「ヘイター・ホテル」の如きも、かつては中流家庭であつたのであろうが、あれだけの立派な部屋と美しい庭園とを維持するのが困難になつたのであろう。御夫婦が先頭に立ち、料理人、給仕等が一つに纏つたチームを構成し、サーヴィスがなかなか行き届いていた。街を歩いても、普通の家の玄関に *No Vacancy* (空室なし) という文字が見受けられたのも、そうした民宿なのであろう。とにかく、民宿も満員のようなだった。

八月六日(月曜)時々晴。

ビーチ・ホテルはウインダムア湖に面する景勝の地に位し、雨に煙る湖を眺めながら朝食をとる。チェック・アウトして、タクシーを雇い、ウアーズワースのダヴ・コッテイジを先ず訪れる。ミュウジウムでこの偉大な自然詩人の遺品を見て、次に、彼の墓に詣でてから、ライダル・マウントへ行き、この詩人が晩年起居した部

屋や遺品を見た。駅に戻り、エディンバラ行き列車の時間を調べたが、明確でないので、タクシーを雇うことにした。午前中に私達を案内してくれた運転手だった。駅前の銀行で百二十弗を磅に替えて貰う。

カーライルを経てエディンバラに向う。途中、カークストーン・パス（峠）を越えてから、アルスウォーターのホテルで昼食をとり、再び出発。カンバーランドの風光は実に素晴しかった。時々驟雨が来た。

午後五時半エディンバラのロイヤル・サーカス・ホテルに到着。

ベッドが四ツもある大きな部屋で、表通りに面した窓にはジレエーニウム（西洋アオイ）の鉢が置いてあった。

八月七日（火曜）晴、時々驟雨。

午前十時ホテルを出て、タクシーでお城へ向う。城内ではフェスティバル祭典を控えて、スタンドの構築中だった。入場料は一人二十片。スコットランド王家を記念する数々の品が展示されていた。例により、武器、軍服等が主であるが、勲章の展示品ケースに、わが国の勲三等旭日中綬章があつたのが私の眼を捉えた。

昼食後、パブリック・ライブラリ（市立図書館）を訪れて、種々の資料を貰う。また、館内の模様を撮影した。

帰途、明日行くアボッツフォードへのバス・ツアの切符を買う。

午後七時半のディナーに、ホワイト・ワインを飲む。例によってサブスタンシャル・フド（たっぷりした料理）。なかなか美味。

八月八日（水曜）晴。

朝食後、例の市立図書館に近い課外研究所のフレイザー氏を訪れ、同氏の御紹介によりディーン・センター（学部長室）のP・マックロウリン氏と面談。英国教育の現況を詳しく聴くことが出来、極めて有益だった。

お茶とビスケットを御馳走になる。帰途には、スコット・モニユメント（記念碑）のところまで車で送って頂いた。

その記念碑の前で、家内と恵美子とに合流した。

昼食後、バスの発着所からアボッツフォード行き của ツア・バスに乗り込む。

スコットの邸宅は、貴族のそれを偲ばせる、実に豪壮なものだが、特に多くの貴

重な蔵書を納めた風格のある書齋はこの主人公たる文豪が如何に博識であつたかを物語っていた。

次にメルローズの廃墟となつた寺院を訪れ、その前庭の美しさに暫時見とれた。

八月九日（木曜）曇。

朝食後、小雨の中を、タクシーでウェーヴァリー駅へ行く。午前九時四十分発の列車に乗るためである。車内で日本への手紙を書く。例によって、のろのろ列車、ヨークに着いたときは、二時間も遅れていた。

途中、北海に面するイギリス海岸の風光が珍らしく、牧場に群がる牛や羊の姿ものどかに、また、シー・ガルズ（かもめ）が沢山飛んでいる光景は、ランカスター方面のそれに似ていた。

大きな荷物を駅の荷物預り所に預けて、タクシーでヨーク大学へ行く。受付に刺を通じて、新制大学のことを調べたいと申し入れ、アシスタント・レジストラ（副事務官）のイングルダーン氏の部屋に案内され、同氏からヨーク大学設立の経過を詳しく説明して頂いた。

この敷地は、元、水捌（みづはく）の悪い所だったが、人造湖（アーティフィシャル・レイク）を造り、その掘った土を盛り上げ、そこに超近代的建物を構築した。特に、サイエンスを重視し、コンピュータやエレクトロンの設備が充実している。

タクシーを、そのまま待たせておいて、暫く話をしてから、キャンパス内の例の人造湖に白鳥が浮かんでいる優雅な風景を眺めて羨しくさえ思った。

八月十日（金曜）曇後晴。

午前七時起床、同八時四十分朝食、ロイヤル・ホテルをチェック・アウト。ヨーク駅からロンドンに帰る。ホテルに保管して貰っておいた大きな荷物を部屋に運び入れて貰い、衣類の詰替えをする。

八月十一日（土曜）晴。

午前七時四十分朝食。タクシーでヒースロウ空港へ行く。ダブリン行きの飛行機に乗る。僅か五十分でダブリン空港に到着。空を飛ぶとイングランドからアイルランドまではほんの一またぎ、その昔、イギリスの王様が叛乱軍鎮定のために遠征した沙翁作「リチャード二世」の史劇が思い出される。

課税品に対する申告すべきものがなかったのでグリーンの通路を通って出る。

タクシーでバズウェル・ホテルへ行く。途中運転手にアベイ座の場所を教えて貰う。ホテルに着いたが、昼食時が過ぎていたので外食しなければならなかった。そこで外出、イタリア料理店でスパゲティ・ナポリタンを注文したが私の口には合わなかった。

ホテルに戻り、一時間程仮眠をとって、再び外出、散歩のついでにアベイ座の前を通り、その写真を撮る。今月の十三日迄オウケイシーの芝居を上演している。また、本年は七十五年祭とのこと。

帰途ダブリンの絵葉書を買った後で、オーコネル・ブリッジの袂で可愛い少年の売っている果物を買う。

八月十二日（日曜）晴。

午前中、恵美子はアイリッシュ・チャーチへ朝の礼拝に行く。家内は多少疲労気味で、ホテルに留まって日本への手紙を書く。自分は観光バスで市内見物に出かける。見物のお目当てはトリニティ・カレッジ位のもので、これというものは見当らない。

ダブリン・ベイ（湾）を最後に二時間半の観光だった。

午後三人揃って当地呼び物のホース・ショウを見物に行く。入場料は一人二〇ペンス、スタンドの指定席は一人一磅。この指定席から各国の騎士がその妙技を競うのを観る。その障碍飛越が素晴しかった。

八月十三日（月曜）晴。

家内と恵美子は小包を郵送するために付近の郵便局へ行く。自分はトリニティ・カレッジの教育学部へ行き、同学部の案内（プロスペクタス）（自一九二三年至同二四年）を需めた。

大学正門のところにクラブ活動の掲示があった。それは、“Japanese Black Belt Instruction”というのであった。どうやら近年アイルランドでも柔道が盛んになっているらしい。日本の有段者でも指導しているのかしら。

午後、三人でグレンダノウの名勝見物をする。このバス・ツアは料金、一人一磅十五片。緑したたる丘陵に囲まれた湖が素的だった。この辺にはキリスト教布教の遺跡が多く、特に会堂の前に建っているカトリックの布教に貢献したその使徒達の

像が印象的だった。

八月十四日（火曜）晴。

午後一時二十分の便で、パリに向う。一時間足らずでオールリ空港に到着。バスで空港ターミナルへ行き、そこからタクシーでホテル・キャリフォーニアに行く。このホテルに三泊する。

パリは暑気が甚しく、夕食に、ボトル半分のワインを飲んだのが利いたので、風に吹かれようとシャンゼリゼ通りに出たが酔いは醒めず、身体は相変らずだ。いいで、ホテルに戻り、直に就寝、夜半寝苦しかったが、誰か上掛け（カヴァレット）をずらして呉れたらしい。

八月十五日（水曜）晴、暑気は相変らず。

今日はヴェルサイユ宮殿の見物。雑踏する観光客が大理石の回廊を土足で踏みつけていたのが痛ましかった。同行の日本青年に引率された六名の女子学生は大陸の観光を終えてロンドンに戻り、帰国の途につくとのこと、如何にも太平楽な、暢気な旅行のようだった。

八月十六日（木曜）晴、夜、雨。

午前七時半起床、朝食後、メトロでジョージ五世駅からシャテレーまで行き、ノートル・ダムに参詣する。さすがに、由緒あるこの大聖堂には各国からの参拝者が多い。堂内のステインド・グラスの美しさ、荘重なパイプオルガンの響、ラテン語で朗唱する祈禱、総てが崇高である。川角宗一郎、多恵子夫妻のために二本の蠟燭を灯す。

聖堂を出て、寺院横の売店でコーラを飲む。家内と恵美子がコーラを飲んでいるところを写真に撮る。このスナップ・ショットは、恐らく僕の傑作であろう。それからセイヌ河を渡り、ルーヴルに入る。内部は観光客で混雑していた。入場券を買う人、土産物を求める人などで足の踏み場もない位。最初、エジプト、次にグレコ・ローマンを観て廻ったが、疲れるばかり、モナ・リザに達するには容易なことではなかった。遂に、後期印象派を観るに至らなかった。

矢鱈^{やたら}と喉が渇く。帰途、喫茶店でお茶を飲む。スクリーブ通りのヘレン・デールという店で土産品のオードコロン、香水その他、約二百弗の買物をする。

ホテルに戻り、入浴後、夕食。このとき、雷鳴轟き、暫く激しい雨を伴う。この激しい雨の音を聞きながら、「点滴石を穿つ」という格言を物哀しく思い出していた。それは、昨日見物したヴェルサイユ宮殿で、観光客の土足が大理石の階段を磨りへらしている光景をこの眼で見たからであつた。

今日の観光客には節度がなく、マナーズは全く言語道断、男も女も、ストリップパー化した。日本の一青年がビーチで寝ころんでいるように、パンツ一枚で、シャンゼリゼに面し、カフェを飲んでいる図は、正にポンペイ最後の日を思わせるものがあつた。経済的アニマル丸出しである。

ルーヴル内で疲れた家内がインフォメーション・ボックス（尤もその文字の出ていなかったせいもあるが）の陰にかくれて、その椅子に腰を下ろしていると、再度、「チケット・プリーズ」と声をかけられて、彼女は苦笑を禁じ得なかつた一幕があつた。

八月十七日（金曜）晴。

マドリッド空港での入国査証は簡単だった。しかし、ペセタを一文も所持してい

なかったので、両替所で長蛇の列を作り、待つこと一時間以上になっても埒が開かないので、出迎えに来て下さった田村米子さんにホテル・パレスまでのタクシー代を立て替えて貰う。

ホテル・パレスは豪華な五ツ星のホテルで、部屋も完備していた。

恵美子は米ちゃんとプラド美術館を見に行った。二人が戻って来る前に、入浴して、暫く休んでいたが、皆で一緒に食事をしようということになり、外出した。

帰途。王宮裏の夜景を見た。丁度月が中天にかかり、風情を添えた。スペイン広場を見てから。プラザ・ホテル前のセルヴァンテスの像を眺めながら暫く休息した。このセルヴァンテスの像の下には、ドン・キホーテとサンチョ・パンザの像があった。米ちゃんから、留学中のマドリッド大学の現況を種々と聴いたが、現在では、この大学生は厳重な警察官の監視下にあるので、ちょっとした喧嘩でも直ぐ検挙されるように学園内には護送車が常に待機しているとのことだった。

八月十八日（土曜）晴。

昼食後、タクシーでスペインの改革戦争のときの戦歿者記念塔を訪れた。

マドリッドを離れて、灌木の茂った広漠たる丘陵地を走り抜けて、岩石が山肌に露出して瘤だらけの山道に入る。一見、浅間の「鬼押し出し」の感がある山腹に雄大な十字架の記念塔があり、その下に巨大な礼拝堂がある。深閑、幽邃な堂内は眼をみはらしめるものがある。これらの建物はフランコ將軍の命令で、俘虜を驅使した産物とのである。

マドリッドに帰着したのは午後の八時であつた。ホテルの食堂で米ちゃんと一緒に晚餐をとる。

米ちゃんと恵美子は暫くの別れを惜んで、フラメンコ見物に出かけた。

私達は、入浴後、直に就寝した。恵美子が戻つて来たのは午前三時頃だったであらうか。

八月十九日（日曜）晴。

昨晩は睡眠不足のため、ちよつと疲労気味。午前十一時タクシーで空港へ行く。午後一時三十分の飛行機でローマへ向う。機内で昼食が出る。三時半ローマ着。時差の関係で四時半となる。空港からタクシーで、クレヤリッジ・ホテルに行く。料

金五千リラ。チップ五百リラ。

八月二十日（月曜）晴。

午前七時起床。朝食後、ヴァティカン博物館を見学。半日掛り。ツア代一人三千五百リラ。

例により、館内は雑踏を極め、案内人の声も交錯して、説明が聴き取りにくい。一巡してぐったりとなる。到るところで土産品を売っている。博物館に入る前に、川角夫妻のためにロザリオを買った。

昼食後、サン・ピエトロやコロシウム等を見学、午後七時頃ホテルに戻った。

八月二十一日（火曜）晴。

午前七時半起床。昨夜来、家内が下痢数回。明朝のナポリ行きを中止して、一日静養することになった。朝食は、恵美子と二人だけでとる。ナポリ行は結局自分一人となり、あとの二人はキャンセルすることにした。自分の料金三万八千リラは、チェック・アウトの際、支払いの中に加算して貰うことにした。

今夜の食事も恵美子と二人。家内の下痢も一応おさまり、経過は良好。

八月二十二日（水曜）晴。

午前七時半、けたたましく電話のベルが鳴る。観光バスが来たというフロントからの知らせであった。あわただしく服を着ると、エレヴェーターで玄関へ降りる。勿論、朝食抜きである。

バスの集合所で、例により、フィレンツェとかナポリとか、行く先によって観光客が振り分けられる。乗車したときは、前方の空席は殆んどなく、已むを得ず一番奥の席に坐った。そこには日本からの女子学生が二人乗っていた。彼女達は九州福岡市の出身で、フランスのニースで一ヶ月間研修会に参加し、それが終って、欧州各地を巡るのだという。過日マドリッドで逢った連中である。

ナポリまでのエクスプレス・ウエイは坦々たるもので、両側に葡萄園がある。ガイドの男が如才なく、奥の座席まで挨拶にやって来る。私が「イタリーではア、ク、ア（水）よりワインの方が安い位だね」と言うと、彼は「良いワインは高価ですよ」と言う。全くその通りだ。

いよいよナポリの市街に入る。海岸通りを通ったとき、五十年前泊ったコンティ

ネンタル・ホテルがちらつと眼に入った。

波止場からフェリーでカプリ島に渡る。途中、サンドウィッチとコーラで朝食抜きの空腹を癒やした。

カプリ島では波止場に近く、そそり立つ岩山が壮観である。ちょっと、南画にでも見るような嶮しさである。

小型バスで標高二百米程の丘陵を登り、そのホテルで昼食をとる。同じ食卓にはニュージランドから来た夫妻と、ケープタウンからという若い女性がいた。勿論、英語で話し合ったが、彼等の英語にはかなり訛なまりがあつて聴き取りにくかった。

昼食後、波止場に戻り、ポンポン蒸汽でカプリ島の突端まで行き、真暗な洞窟内を巡航する。洞窟の入口から差し込む日光に、その内部の海水は翡翠ひすいのような青色で夢幻的に光る。まるで夜光虫の如く。その洞窟を出るとき、若干の心付を船頭に与え、またポンポン蒸汽に乗り換えて波止場に戻り、別のフェリーでソレントへ行く。

「帰れソレントへ」の民謡が思い出される。風光明媚な港に入ると、直に百段以

上もある階段を登って、丘上の通りで待合わせているバスに乗り、ポンペイへ向う。遺跡の外廓をちらっと見る。ちよつと垣間^{かいま}見ただけ。

近所のホテルで夕食を摂る。此度のポンペイ観光は、まるで鰻屋の店先を通して、その匂いを嗅いだ程度だった。

前記のフェリーではイタリア民謡を手風琴に合わせて歌う男が甲高い声を張り上げて歌っていたが、その歌が終ると、観光客の間を縫って金を貰って歩き廻った。

また、一人の托鉢僧も乗客に喜捨を求めて巡り、法衣の帯をキ、ユツト締めると、軽快な足取りで出て行った。ローレンス・スターンの「感傷旅行」^{センチメンタルジャーニー}でのカレーにおけるフランスカンの修道士のことが思い出された。

帰途はローマへ直行。午後十一時過ぎホテルに戻った。今日のツアは丸一日掛りで、すっかり疲れた。入浴して早速就眠。明日は午前六時半には起きなくてはならない。

いよいよジュネーヴへ行くのである。今日のツアは自分一人ではなかったのだ。確かに強行軍だったのだから。

欧州三人旅（その二）

昭和五十一年三月私は神奈川県立外語短期大学を退職した。八十歳になったのである。

現役を退くに当り、私は妻から「御苦労さんでした」という言葉が聞きたかったのである。否、正直のところ、家内が生きていたら「The same to you」（あんたもね）と言いたかったのである。

現役を退き、今では週に一回、戸塚の日立京浜工業専門学院に出講するだけの身軽な身分となったので昭和五十一年の夏、三週間の欧州旅行をすることにした。

昨年一月二十一日、家内が亡くなってから、その一周忌も済み、漸く心の安静を取り戻すようになった頃、四女淳恵から欧州の見学旅行がしたいという希望が出たとき、私は直に賛成した。と言うのは、彼女は英語教師になってから已に二十年にもなるが、未だ英米へは行ったことがないからであった。また、一つには、四年前に私共夫婦の曾遊の地、特にイギリスの風物に接しさせ、母親の在りし日を偲ばせたくもあつたからである。此度の同行者は淳恵が新しいメンバーという訳。観光が

主ではあるが、淳恵自身の研修的な意味もあり、簡単なことは自分で積極的に英語を使ってみるように促し、複雑なことには姉の助太刀を頼むことにさせた。

七月三十日夜八時羽田出発

ブリティシ・エアウェイズの987便。この日、羽田空港は空前の人出で、正に、人、人、人の洪水。エキソダスという英語があるが、日本脱出とでも言いたい風景であった。

一般観光客の他に欧米諸国への研修生で溢れていた。それも、中、高生という年少者が目立っていた。偶々機内で、隣に坐った若者は東京の私立高校生で、ケンブリッジで二週間の研修を終えたら、パリを起点として一週間大陸での観光に廻ること。生れて初めての珍らしい経験に眼を^{みは}瞠り、耳をそば立て、しきりにメモを取っている姿は殊勝だった。

アンカレッジで給油のため一時間余停止、ここで乗務員の交代があり、乗客は飛行機を降り、空港待合所で機の整備完了を待ち、免税の土産品の買物に時を過す。やがて、整備完了の知らせで、再び機内に入る。程なく出発。日本を出発してから

今迄仮眠がとれず、閉口したが、漸々北極圏に向い、グリーンランドの上空を進むにつれて、夜が明け、益々眠りが妨げられ、少々頭が呆^ばっとなり、疲労気味でヒースロウ空港に到着。通関手続を済ませ、タクシーを雇ってロンドン市内のワルドルフ・ホテルに落付いたときには、すっかり疲れきって、睡魔に襲われ、恵美子と淳恵がオール・ソウルズ・チャーチの日曜礼拝に出かけて、戻るまで自分はホテル中央の休憩室^{ラウンジ}で、うつら／＼と居眠りしながらチェック・インの時間を待っているのは辛らかった。

ロンドンには前後八日間滞在した。最初、オールドウィッチのワルドーフ・ホテルに四泊の後、ストラットフォード・アポン・エーヴォン、湖畔地方を経て、エディンバラへの約一週間の旅からロンドンに戻り、ドルーリーレーン・ホテルに二泊し、大陸に向い、パリで三泊、ハイデルベルグ、フランクフルトに各一泊して、再びロンドンに帰り、カーゾン・ストリーートのウォシントン・ホテルに二泊した。

前述したように、此度の旅行は淳恵の研修が主なもので、ロンドン滞在中も、彼女のプランを重視し、ナショナル・ギャラリーや、テート・ギャラリーで名画の鑑賞

に相当時間をかけたが、ブリティシ・ミュージアムでは、たま／＼ルーベンスの生誕四百年祭という特別展があったので、これにも時間を割いた。今、夫々のギャラリーでの名画について云々する能力と余裕とを持たぬが、ターナーのことについて一言しておきたい。

ジョン・ラスキンが「近代画家論」^{モダンペインターズ}の中で、ターナーの絵画を推賞し、美学の原理を確立している。ラスキンのこの美意識こそ宗教に代わるべきものだと言ってよい。従来、ルネッサンスにおけるイタリーの巨匠による絵画が模範とされ、イギリスの画家などは問題とされなかった。しかし、ラスキンによるターナーの発見は正に画期的のものとして頗る意義が深い。私共絵画の素人にとっても、この天才画家の発見以来、その他の風景画家に対して、より多くの関心が払われ、延いてはイギリスの風景そのものに対して一層心の惹かれるようになったことも事実である。

ロンドン市内の名所見物だけでも、一週間や二週間で足りぬことは明白で、況んや英文学縁^{ゆかり}の場所などを訪ねたら、恐らく一ヶ月はかかるであろう。

セント・ポールズをお詣りした後、淳恵と私はそこで恵美子と別れた。彼女はウ

インポール街に住む知人の家へ出かけた。因にそのお宅というのは、あの有名な詩人ブラウニングの夫人が結婚前に住んでいた所だそうだ。同夫人のブラウニングとの結婚ロマンスは文学史上有名な話である。

淳恵と私は恵美子と別れ、ロンドン塔の見物に行った。四年前家内達と三人で見物したが、此度は、流石にシルヴァー・ジュビリー（二十五年祝典）のため、世界各地からの見物客が入場券を買うために長蛇の列を作っていた。

四年前、ここを訪れたときの家内の和服姿が未だにこの眼に浮んで来る。恵美子の撮ってくれたホワイト・ホールの階段に立つ私達夫婦の写真は今でもアルバムに収まっているが、淳恵にもなつかしく思われたに相違ない。

此度のロンドン滞在では宿が三度変ったが、いずれも都心の便利な所だったので、短時間で案外能率良く見物が出来た。

八月三日

チャーリング・クロス駅でイギリス鉄道の回遊券使用登録を済ませて、同駅から午前九時六分発の直行でドウヴァーに向う。

南英のケント州は英国の花園と呼ばれるほど田園の美しい所で、緑野に草を食む牛を見たとき、大英博物館のルーベンス展のことを思い浮かべた。

ドウヴァー・プライアリで下車、タクシーを雇って、シェークスピアの丘の見える辺に行き、車を降りてドウヴァー海岸に通ずる短い坂道を下りて浜辺に出た。土地の人らしい家族連れが水着のまま、団欒していた。子供達は水際に近く、水に戯れていたが、泳いでいる人は少なかった。尤も水は濁っており、波はかなり荒かった。

この浜辺を瞰下すあの有名な白亜の断崖が聳え立っている。全く眼を瞠らせる絶景である。正に雄大なる聖域の感がある。この景色をカメラに収めた。そして暫くこの浜辺を歩きながら綺麗な小石を拾い集めた。このシェークスピアの丘は、御存知沙翁の四大悲劇中、最も悲惨な「リア王」の第四幕第六場で、グロスター伯が、妾腹の息子エドマンドに裏切られ、コーンウォール侯のために両眼を焼け火箸で扶ぐり取られ、盲目となりながらも、狂気のリア王の後を追ってドウヴァーに来る。彼は途中で逢った狂人乞食が身をやつした実子エドガーとも知らず、その手に引か

れ、この断崖へとたどり着く。自殺する覚悟なのだ。

エドガーは父の意図を覚つて、これを救うのであるが、この場面で、断崖の頂から遙か下の浜辺を見下しながら語るこの大自然の描写は正に迫真的な科白として有名である。

この丘の頂上からは、浜の無数の小石を噛む波の音も左程大きくは聞こえて来ない。

これらの小石を「The numberless idle pebbles」（無数のやぐざな小石）と呼んでいるが、実に簡明率直な表現である。

帰途キャンタベリに立ち寄る。トマス・ア・ベケットの昔を偲ぶ。主の祈りを捧ぐる僧侶の莊重な声が、ステインド・グラスに彩られた窓より洩れる日光と相和して、聖堂内に響き渡るのを聞いて深い感銘を覚えた。

さて、ドウヴァー街道については、チャールズ・ディケンズの有名な「二都物語」(A Tale of Two Cities)の第二章で、このドウヴァー街道をロンドンからの郵便車が霧深い暗夜に疾走して来る場面がある。お芝居好きなこの作家の得意な設

定である。このドウヴァーメールを追ってロンドンのテルスン銀行からの使者が馬を走らせて来る。当時この街道の旅は甚だ物騒だったらしく、郵便車には御者の他に、口径の大きな喇叭銃を持った車掌が乗っていた。この郵便車を追って来る乗馬の男に、その車掌が喇叭銃を構えて「ホールト Halt, ホールト halt」（止まれ、止まれ）と叫ぶところがある。これは映画もどきというか、写実的な「二都物語」という大ロマンの幕開きには相応しい場面である。

八月四日

ストラットフォード・アポン・エーヴォンへ行く途中、オックスフォードにちよつと立ち寄る。

英国に来る度に、オックスフォードやケンブリッジを訪れることにしている。何といっても、この二つの都市はイギリスにおける学問の府として敬意を表するのだが、特にオックスフォードのモードリン (Magdalen) コリッジは、わが秩父宮様が御留学になった所でもあり、殿下の御留学に当り、ロンドン大学音声学教室のミス・ホウルドワース (Miss Holdworth) が殿下に発音の御指南を申し上げたことがあつ

た。このミス・ホウルドワースこそ自分がロンドン大学で音声学を学んだとき、一番御世話になった恩師で、あの流麗な発音には心から敬意を表していたためでもあった。

ストラットフォードでは、スウォンズ・ネスト（白鳥の巣）ホテルに泊る。ここはロンドンのホテルのような大きなものではないが、閑静が取柄で、ロイヤル・ナショナル・シアター（イギリス王立劇場）へ歩いて数分という便利な所で、部屋の窓からは舟遊びする若者や、エーヴォン河に浮ぶ白鳥の姿も見える風雅な場所である。翌晩、ロイヤル・シアターで沙翁の「ヘンリ六世」第一部を観る。ストール（Stall）とかドレス・サークル（Dress Circle）などの良い座席が全部売り切れていたので、曰むなく一番安い席（二磅）で我慢した。所謂ギャラリー（天上棧敷）という所で、芝居の方では一番高い所にある席だから天井棧敷、ヘヴン（天国）という異名がある位である。しかし劇場の音響効果の良いのと、訓練された俳優の見事な発声法によって、ビン／＼天上棧敷まで科白が響く程に聞えて来るのであった。「ヘンリ六世」第一部という芝居は、いわゆる百年戦争における英仏の葛藤を扱

ったもの。フランス側では、プーセル、つまり、Joan of Ark（ジャン・ダーク）が活躍し、英国側では愛国の勇士タルボット父子の奮戦する活気に溢れた芝居である。

ストラットフォードの二日間は余りにも短くて、沙翁^{ゆかり}由縁の地を隈なく歴訪するとは出来ぬし、また、ここで、この世界的大劇詩人について語るには余りにも材料が多過ぎるので、それらの話は割愛することにする。

八月六日

スウォンズ・ネスト・ホテルをチェック・アウトしたときは糠雨が降っていたが、タクシーでストラットフォード駅に着く頃には幸いにも雨は止んでいた。午前九時十分の列車にやっと間に合い、バーミンガムに向う。

バーミンガムで下車して、ペンリス行の列車に乗るためには、ニュー・ストリート・ステーションまで歩かねばならなかった。尤も数分のところなので、淳恵が例によってトランクを押して行く。

ペンリス駅に着いたが、バスもタクシーも無かったので、暫く待った。そうこうするうちに、幸い一台拾って、ケズウィックに行く。ロイヤル・オウク(Royal Oak)

というこの町の中央にある瀟洒なホテルで泊る。

小さい町だから夕食はホテルでとる。料理は相当で、ワインも美味だった。

翌七日はもうエディンバラへ発たねばならぬので、タクシーを雇って、グラスミア湖をはじめ、ダヴ・コッテージやライダル・マウントというワーズワースゆかり由縁の場所を巡歴して、ペンリスへ行く。ライダル・マウントでは恵美子と淳恵を記念館の前に立たせて、写真を撮った。それは先年亡妻の写真を撮った所だったからである。

ケズウィックからペンリスへは往路とは逆であるが、カンバーランドの風景は素晴しかった。

エディンバラへの途中、クライド河畔に立ち並ぶ起重機は荘観だったが、海運国イギリスの残照の如き感もしないではなかった。

午後三時半頃、エディンバラのウェーヴァリー駅に到着。直にタクシーでカウンティ・ホテルに行く。このホテルは前回のホテルよりも都心のプリンシス・ストリートにも近く、便利な所である。

八月八日

午後、エディンバラ大学を皮切りに、車でホーリー・ルード・パレスに行き、更にその公園の裏山の頂上を巡って宿に戻った。この裏山からの眺望は例のお城からの眺めに比べて優るとも劣らぬ絶景だった。

翌九日、汽車でグラスゴウを経て、バロックに向う。ロック・ロモンドを一瞥するためである。バロック駅前のレストランで昼食をとる。スコッチ・ブロス、サーモン・サラダにジェリー入りアイスクリームの献立は胃の腑を満足させてくれた。駅前から徒歩で約十分、湖畔に出た。箱根芦の湖の遊覧船に似た観光船が丁度出航するところだった。

湖畔には親子連れの休日を楽しむ連中が一杯だった。芦の湖同様、俗化して、こも浪漫主義華やかかなりし頃の夢は已に醒めてしまっていた。

此度の旅行では、残念ながら、サー・ウォルター・スコットの邸宅のあるアボッツフォードを訪れることは出来なかった。

プリンス・ストリートの記念碑が示すように、このスコットランドが生んだ偉大

な詩人、また歴史小説家であるスコットは稀にみる高潔な人格者として、イギリス文学史上、沙翁やディケンズと共に語るべきことが余りにも多い作家である。

八月十日

ホテルで朝食をとらず、呼んで貰ったタクシーでウエーヴァリー駅へ行く。

午前八時発のロンドン（キングズ・クロス駅）行きの列車に乗る前に、駅構内のレストランで、やっと空席を見付けて、恵美子と淳恵の運んでくれたセルフ・サーヴィスのあわただしい朝食をとった。

列車は暫くイギリスの東海岸を走る。前回の旅行でもそうだったが、北海に面するこの海岸は単調のようだが、その優雅なたたずまいは印象的で、車窓から見る緑の野原と、そそり立つ崖の岩肌、青い静かな海とが、まるで日本画のような趣を呈している。

ヨークには停車せず、列車は南へ驀進した。キングズ・クロス駅で暫くタクシーの順番を待ち、先ずワルドーフ・ホテルへ車を馳せて、預けておいた荷物を受取り、ドルーリー・レーン・ホテルへ行く、このホテルはストラランドにも余り遠くなく、

オックスフォード・サーカスやピカデリーへも楽に行ける便利な所だ。

八月十一日

朝食後、セント・ポール大聖堂へお詣りした。恵美子はお友達のM夫人に逢うために、ピカデリーへ行くので、淳恵と私はそこで別れ、地下鉄でタワー・ヒルまで行き、ロンドン塔を見学した後、付近の棧橋からウエストミンスターまで遊覧船に乗る。途中、向岸に近く、船火事があり、化学薬品で消火に努めている消防艇の活動を見た。赤褐色の煙が盛んに立ち昇る光景が印象的だった。

八月十二日

大きな荷物をホテルにそのまま預けて、午前八時頃チェック・アウトした。朝食をとらず、タクシーをヒースロー空港に走らせたが、パリ行の飛行機がストのため遅れ、結局、五時間も待たなければならなかった。

朝食は空港でだったが、昼はイギリス航空の方から軽食（ライト・リフレッシュメンツ）の接待があった。

パリではオペラ座の通りにあるルーヴル・ホテル・コンコルドに落付く。ここに

三泊。その間にルーヴルの見学、ノートル・ダムへの参詣。シャルトルまで出かけて典雅なこの寺院の素晴らしいステインド・グラスに眼を瞠った。

八月十五日

パリを後にして、西独のフランクフルトへ行き、ハイデルベルグの古城に近いパーク・ホテル・アトランティックに一泊し、翌日、鉄道でフランクフルトからコブレントツまで行き、沿線のライン河畔でその風光を鑑賞して、フランクフルトに戻り、一泊した。

ハイデルベルグで泊ったその晩、夕食の用意がないというので、古城の麓まで夕闇をついて歩くこと小一時間、疲労と空腹とで、やっと辿り着いた街角のイタリア料理店に入って、蠟燭の灯（キャンドル・ライト）の下で飲んだビールのうまさ、と、魚料理の珍味とは此度の旅行中の白眉ともいべきものであった。

八月十七日

また／＼ロンドンに戻る。今度のホテルはカーゾン街に近いウォシントンである。ここもリーゼンド街に近い便利な所で、娘達の買物には絶好な場所であった。

八月十八日

ロンドン滞在最後の晩に、ホテルの食堂で恵美子の友人星野さんを招いてお別れの晩餐を共にした。冷したワインの舌ざわりがとても美味だった。

八月十九日

朝から雨だった。朝食後、恵美子と淳恵は最後のショッピングに出かける。

午前十一時チェックアウトして、ヒースロウ空港に向う。午後二時発の予定だったが、給食係（ケータリング・スタッフ）のストのため遅れに遅れ、午後四時やっと機上の人となったが、飛行機が動き出したのは八時過ぎになった。アンカレッジに着いたときには、二十日中の羽田着は不可能と分かり、待つこと更に数時間、従って私達が羽田に着いたのは二十一日の朝、午前六時三十分だった。

さて、此度の旅行では、娘二人の介添えがあったので全く不自由がなかった。心から感謝している。

ところで、空の旅には一抹の不安があるものだが、そうした不安に襲われたときには、常に上よりの御加護のあることを信じざるを得なかった。

曾遊の地を訪ね、四年前に妻と共に楽しんだ思い出に浸りながら、三週間のこの旅行を、私は今反芻するように脳裏に描いている。

「召さるとも悔は残らじ空の旅」と機内で駄句をものしたが、それは、たとえば、事故があっても、空の上ならば、天国にいる彼女との再会を喜ぶことが出来るであろうという意味であった。

欧州三人旅（その三）

自昭和五十六年七月二十五日至同年八月十五日

七月二十五日

午前七時少々過ぎ、タクシーで東京の箱崎に向う。爽かな朝だ。八時半箱崎着。九時二十分^{トップノッチ}T・Nの係員に会う。十時十分成田空港行のバスで箱崎を出発。約一時間成田着、空港で約二時間待たされ、午後二時三十分、ソ連機五八二便に搭乗。成田を出発。九十九里浜の白い海岸線を眼下に、やがて、機は新潟、佐渡を俯瞰しながら日本の領空を離れ、ソ連領に入る。約九時間後にモスクウ空港に到着。遠景

の白樺の林は昔と変らない。

凡そ一時間の休憩後、ロンドンに向う。午後九時三十分ヒースロウ空港着。タクシーでピカデリー・ホテルに至り、ここに二泊。

このホテルの界限は昔と殆んど変っていないようだが、日本を出発するに当り、成田空港に至る周辺の変化には全く驚いた。

何という変りようだろう!! 所謂、滄桑そうそうの変、正に今昔の感に堪えない。成田付近の低い丘が起伏する狭い地域に、田圃の点在する地形は昔と変りはないが、舗装された高速道路が田園風景を蹴飛ばすように突っ走っている。自分が一年志願兵當時、馬上から眺めた景觀は何処へ行つたのかと淋しかった。

七月二十六日

午前五時半起床。朝食をとつたのは十時少し前、地下鉄でパディントン駅へ行き、十一時四十五分発の列車でウインザーに向う。

スラウで乗換え、ウインザーで下車。町の広場にあるヴィクトリア女王の銅像を仰ぎ見ながらお城への緩やかな坂道を登る。九年前家内や恵美子と訪れたときのこ

とが思い出される。

城内の庭園を巡る参観者の数も、本年は特に王室の御慶事のために夥しく、歩調をとって巡邏する衛兵の姿は凜々しいというよりも寧ろヒューモラスにさえ思われた。

ウインザー城を出て、イートン校を訪ねた。昔と違って校内見物には入場料を取っている。あの有名な大食堂などは開放されておらず、元、廊下に飾られていた校友戦死者の写真なども、今では多く取り外されていた。

屋外に出ると、日盛りの暑さは相当酷きびしかったが、校庭の緑が目にしみ、テムズに浮ぶボウトを眺めると自ら涼氣を覚えた。

歩き疲れて、橋畔のバーで憩い、お茶を飲み、ケーキを食べ、やっと元氣を取り戻した。

七月二十七日

ピカデリー・ホテルをチェック・アウトする。宿泊料約百八十鎊を支払う。ホテル左隣のスコットランド銀行で八百弗を鎊に替える。チェック・アウトに先立ち、

前日、付近のケント・ハウス内のT・Nの事務所へ行き、列車でパリからコペンハーゲン行きを飛行機に変更、また、最後のコース、コペンハーゲンからロンドンへも飛行機に変更しておいた。従って運賃が一人当り二百七十五磅も支払わねばならなかった。その結果、パリ滞在の四泊が五泊となり、コペンハーゲン滞在は一日減って三泊となった。そして、八月十一日、ロンドンに戻り、同十四日ヒースロウ空港を発って往路と同じモスコウ経由で成田に帰るといふように変更した。これは娘達が私の老軀を心配してのことであつた。

さて二十七日午前、パディントンを発した列車は一路北進してエディンバラに向う。この急行は途中ニューカスルで停車した。

ここは北海に臨む海港で、昔から工業都市として栄え、*"To carry coals to Newcastle"* という文句（無駄なことをするの意）は余りにも有名で、ここに敢えて引用するのは、それこそ蛇足であろう。

ただ、スコットランドの国境に近い海港、ベリックに注ぐトウィード河を溯れば、サー・ウォルター・スコットが晩年を過したあのアボッツフォードに通ずることに気

付いたとは、さても迂闊なことであつた。

エディンバラには午後六時半に到着。早速ウェーヴァリー駅からタクシーでザ・ボウスト・ハウス・ホテルへ行く。ここは都心からちよつと離れた閑静なところで、動物園のある丘の麓にあつた。バスの便も良く、容易に市の中央へ出ることが出来た。

七月二十八日

朝食後、十二番のバスでプリンス・ストリートのスコット記念碑付近まで行き、下車して、直ぐ近所のウェーヴァリー駅で、明日、インヴァーネスへ行く列車の時刻を確認した。それからお城へ通ずる舗道を上って行くと、雨が降り出したので、用意の洋傘をさした。恵美子と淳恵は傍の店で買物をするために立ち寄る。暫く外で待っていたが、自分も中に入って、ネクタイやソックスなどを買う。それから引き返して郵便局へ行き、日本への葉書を出し、また記念切手を買う。そこを出て、隣のブリティシ・ノース・ホテルの食堂で昼食をとった。

それから例の記念碑脇の花園を通り抜け、ナショナル・ギャラリーに入り、絵画を

鑑賞、特に、フランスの近代画家の作品が眼を惹いた。十二番のバスでホテルに戻る。

BBCのテレビ番組で、チャールズ皇太子とダイアナ嬢との御結婚式に先立って行われた御対談の模様を観た。式典は明二十九日、セントポールの大聖堂で行われる。

神奈川県立外語短大出身の教え子小林泰子さんと、南里多美さんに大体同じ趣旨の端書^{はがき}（英文）を送った。

Here I am in Edinburgh, after revisiting Windsor Castle and Eton College amidst the Prince of Wales' matrimonial celebration. On the very day of the Royal Wedding we'll leave for Inverness associated with Macbeth's castle, as you know, one of the four great tragedies by Shakespeare. Please give my best wishes to your husband and little one.

粗末な英文ではあるが、大意は、「英国皇太子の御婚儀の最中、曾遊の地、ウィンザーやイートン校を訪ねた後、エディンバラに参りました。二十九日御婚儀の当

日、沙翁の四大悲劇の一つ、マクベスの居城に由縁ゆかりのあるインヴァネスに向います。御主人様とお子さんによろしく」というのであった。正直のところ、何のてらいもなく簡潔な便りのつもりで、つい、悪文を書いてしまった。後でしまったというのが実感。

七月二十九日

チャールズ皇太子とダイアナ姫との御婚儀の当日である。朝食を摂るために食堂に行く。腰を下ろして、キャフェテリア式の料理を食べ始めたとき、突然、警報が鳴り出した。何かかと思っていると、食堂の給仕が、「何卒こちらへ避難して下さい」と言って誘導するのであった。どうやら火事が発生したらしい。とに角、係員の誘導で屋外に出て、動物園入口に通ずる広場に避難した。そのうちに三台の消防車がサイレンの音みづめもけたましく、ホテルの下の方から登って来た。宿泊人一同はその広場で成行きを熟視みづめしている。三台の中には梯子車もあった。消防夫は甲斐々々しく活動を始めた。ものの二十分も経過すると、火事の原因——警報器が急に鳴り出した——が突き止められたらしい。宿泊客は屋内に戻った。全く狐につままれたような

出来事であった。再び私達は食堂へ戻った。

七月三十日

午前九時三十分の列車でエディンバラを発ち、インヴァネスに向う。あの長い Firth of Forth の鉄橋を渡ったとき、この入江の壮観に眼を瞠った。Perth で数分停車した後、列車は草原の間を走った。

インヴァネス駅に着くと、タクシーで、キングズミルズ・ホテルへ行く。駅からは約二哩程のところだった。部屋に通されたとき、その部屋の静かな佇まいが先ず気に入った。レースのカーテン越しに美しい庭園が見える。このホテルの玄関に入って先ず気付いたことは、壁に、この国の田園詩人として有名なロバート・バーンズが1787年の九月五日（水曜日）に、このホテルで食事をしたという額がかけてあったことだ。

私共は食堂で夕食を摂った。白葡萄酒の杯を傾けて陶然となった。

部屋に戻って、ロイヤル・ウエディングのテレビ中継を観た。ロンドンのセント・ポールズにおける荘厳な式典の様子が電波に乗って伝えられた。自分はワインの

利き目で非常に眠くなっていた。風呂に入って、鏡の中の自分の顔を見て驚いた。まるで真紅な章魚デメルフィンだった。ベッドに入ると、直ぐ、前後不覚に眠ってしまった。

七月三十一日

午前五時に眼が醒めた。朝食を済まし、九時四十分にチェック・アウトした。宿泊代は七十八磅五十五片だった。

例の有名なネス湖見物には、前日、タクシーで行った。怪物の出没するというこの湖は入江フアースに通じているので、怪物というのは、ひよっとして海から潜入したものではなからう？ とに角、外見は静かで、何の変哲もなく、満々たる水を湛えて、最も深い所は三百米もあるそうだ。

案内してくれた運転手は頭髮も白くなった初老の男であったが、「何歳かね」と尋ねると、「六十四歳です」とのことだった。「僕は八十五だよ」と言うと、彼は驚いて、「では、手前はヒョッコですなあ」と言って笑っていた。

帰途、マクベスの居城というのを見た。それは、低い丘の上に立つ小さい城で、沙翁劇に出て来るあの静寂な佇まいは見られなかった。現在は裁判所のようなもの

に使用されているそうだが、果して昔の儘のものだか如何かは疑わしい。

ネス湖見物の翌日、同じ運転手の車で駅へ行き。午前十時三十五分の列車でロンドンに向う。列車は、パースを過ぎて、西の方角へと進み、次に停車したのはスターリングという廃墟となった城が左手に聳える小綺麗な町だった。それからコウトブリッジ・セントラル、ノースウエル、カーライル、ランカスター、プレストン、クルー、バーミンガム、コヴェントリ、ラグビー等を経て、ロンドンのキングズクロス駅に到着。地下鉄で、ピカデリー・サーカスへ、そして再びピカデリー・ホテルに入った。

八月一日

昨夜ロンドンに戻り、今朝またチェプストウへ行く。日本を発つ前に、T・Nからチェプストウに宿をとるように依頼したが、全然連絡がとれなかったので、ロンドンに来てから再び同社の出張所に頼んだが埒が開かず、プリストルへ行つて、宿を捜して下さいとのことであつたので、まあ当って砕けるで、チェプストウへ直行することにした。

着いて見て、驚いたことは、ここは無人駅で、駅の出入口があるだけで、改札口がなく、駅の扉は堅く閉ざされていた。そんな所だから駅前にタクシーなどのある筈もなかった。それで、ぶら／＼と町の中央まで歩いて行き、旅行案内所でティンターン・アベイ行きのバス発着所を教えて貰い、そこへ行った。バスが出るまで三十分程間があるというので、傍の喫茶店で、コーラを飲んだりして時を過した。愈々バスに乗り込んでティンターンに向う。

坦々たる田舎道。漸々^{だん}両側^{せま}が逼り、鬱蒼たる林の間を縫って行くうちに、再び右側が開けて、Wye^{ワイ}河のほとりのティンターン・アベイの廃墟がその姿を現わした。嘗ては荘厳な大伽藍であったことを偲ばせるその壁面や、周囲の遺蹟は、若き日のワーズワースと彼の妹ドロシーの眼を瞠らせ、この風光を賞した「Tintern Abbey」の詩は、五年前に訪れたその溪谷を再び訪ねての感懷を誦^{うた}ったものであるが、ブリストル(Bristol)に戻り、それを一気呵成に書き下したということである。流麗なこの詩は吟誦に値するリズムカルなもので、自分が、昔、早大の英文科時代に孤雁吉江喬松先生の講義を聴いた頃がなつかしく思い出された。

この僧庵の裏手を流れるワイ河の岸边に出て、その溪流を眺めたとき、箱根の塔の沢あたりのそれを思い浮べた。

資料館でこの僧庵の歴史など、由縁ゆかりの展示品を見てからここを辞し、チェプストウの町へ戻り、ジョージ・ホテルという宿に一泊した。こうした小さい町の旅館には、却って旅の疲れを癒やす静けさと風情とがあった。

ここで作った駄句とその英訳は次の通り。

美を競う　ワイ河の畔ほとり　夏の花

Flowers in summer,

In their beauty vie

With one another,

Near the Wye

八月三日

前日チェプストウからロンドンに戻った私共は、聖日を守るために、ソールズベリの大聖堂を訪れることにした。この大聖堂は歴史的にも、またその建築美を以て

も有名である。ウオータールー駅のビュッフェで軽い朝食をとる。翌日パリへ行くために海峡を渡るシー・トレインを予約した。ソールズベリでは堂内の素晴らしさに眼をみはり、聖歌隊の夕べの祈りにおける合唱に耳を傾けた。

八月四日

海峡横断の快速艇、Hovercraft が Dover から、Boulogne ^{ブーロワニユ}へ渡る。海上は霧が深く、視界は狭かったが、無事ブーロウニユに到着。直にパリ行きの列車に乗り込む。間もなく入って来た車掌に鉄道料金を支払う。一等車であったが、二等料金で良いと言っていた。

八月五日

昨夜からこのホテルに厄介になっているが、この宿は、Excelsior ^{エキセルシオール} と言い、オペラ座に近く、町の喧騒は困るが、非常に便利なところにあった。早速、銀行で三百弗をフランに換える。千七百六十四フランだった。

ルーヴルへ行ったが、生憎、休館だった。前庭の芝生に横たわって青空を仰ぎ見た。傍に「カインの息子達」という銅像があった。罪深い自分を顧みて、くすぐっ

たい気持になった。

セイヌ河の岸を歩いて、ノートル・ダムへ向う。八年前に妻と共に渡ったあの橋、また、その橋の上で撮った写真のことなど、なつかしく思い出される。大聖堂の周辺は、観光バスや観光客で混み合っていた。しかし、薄暗い堂内には、ゆらめく献灯の炎がステインド・グラスに反映していた。

堂の外には、驢馬に輓かせた屋台で、野草からとった香料ラヴエンダーを売る行商人がいた。

聖堂横の茶店で休息したが、この前、妻と恵美子がコーラを飲んでいるところをスナップしたあの写真、私の傑作と自負しているあの写真の現場は、残念ながら様子が変わってしまった。

今夏は英国王家の御婚儀でロンドン是世界中からの観光客で雑踏を極めているが、恰も世界の人種展とでもいうべき光景は、その流れがパリにおいても見られた。白と黒と鶯色の三色を基本として、遠きはアングロ・サクソンの昔、シャーウッドのロビンフッドを偲おもはせる面構えから、わが国の人気タレントそっくりといったご面相もあって面白いが、老いも若きも半裸の男女がアイスクリーム・コーンを囓かって

歩いているのが目立った。

八月七日

今朝起きたのは八時過ぎだった。朝食のテーブルについたのは十時頃。モンマルトルへ行く。メトロでレニングラードを経て、アンヴェルで下車、大聖堂に通ずる門前町で、浅草の仲店か、六本木のようなブティックの店の前を通る。聖堂正面の入口へと緩やかな傾斜の石段がある。それを登りつめると、パリの下町が一望のうちに集る。

堂内にはわれらが救主、イエス・キリストの像が飾られた祭壇の上に君臨し、その像の下のの照明によって輝く十字架が私共の視線を捉えた。私達は暫く椅子に腰を下して、われらが救主を仰ぎながら敬虔な祈りを捧げた。

帰路、門前町で、恵美子と淳恵は、友人や娘達のために土産物を買った。町角の一軒のバーで晩いおそ昼食をとった。コーラの中瓶とオムレツ、季節物のサラダ、オニオン・スープとピラフという取り合せであった。

ホテルへ戻り、小休止の後、恵美子と淳恵は買物に出かけた。パリに來ると常に

行く「ヤマナカ」という店であろう。二人はその足で、後期印象派の絵画を観に出かけた。門限だったが、恵美子がネ、バ、ッ、テ無理に入れて貰ったそうだ。二人は、戻って来たとき、相当疲れていた様子だったが、グラント・ホテル階下のレストランへ行き、晚餐をとった。

八月八日

午前六時に眼が覚めたが、娘達が七時半に起きるまで、ベッドの上に横になっていた。

常よりは早目に朝食を食べた。十一時頃、五日間のホテル代千四百七十五フランを支払ってチェック・アウトした。

シャルルドゴール空港へ行くので、タクシーを頼んだ。約二十五分で空港に着く。コペンハーゲン行の飛行機は十四時十五分出発。

このスカンディナヴィア機は十六時にコペンハーゲン空港に到着。タクシーでホテル・サヴォイへ行く。晚餐は外で摂った。シャワーを浴び、小休止の後、いつもより早目に就寝。

八月九日

恵美子が腰痛を訴えたので、彼女を部屋に残して、淳恵と私は散歩に出かけた。

恵美子が寝ているので、メイドさんには、部屋の掃除をしないで良いと伝えて、ホテルを出た。裏手の教会の前を通って、近くの公園を散歩した。東京の不忍の池よりも遙かに大きな池には野鴨^{かも}や白鳥が静かな水面に浮かんでいた。その公園から町の方へ出て、チボリ公園の前を通り、アンデルセン・ブールヴァールへ出た。チボリの蠟細工博物館をちよつと覗^{のぞ}いてから、アンデルセンの銅像前で写真を撮った。

私がベンチで腰を下している間に、淳恵は観光案内所を捜して、明日、エルシノアのハムレットのお城見物の切符を三枚予約して来た。これは五時間のツアで、一人宛八十五クローネであった。それからチーズ・ハンバーガーと飲み物を買ってホテルに戻り、恵美子と一緒に昼食した。午後四時頃、恵美子の具合が良くなったので、三人揃ってチボリへ行くことが出来た。チボリは確かに夢の国で、園内には多勢の子供がいた。いや、子供ばかりではなく、それに劣らず大人の数も大変なものであった。老人ですら、自分達の若き日を偲んで、見るからに嬉しそうだった。

チボリの呼び物の一つは、勿論、衛兵の行進であり、金の馬車に乗った少年少女を中に、行進曲に合わせて園内を行進する様は絵巻物のように美しかった。砲車を引っぱる少年水兵も可愛らしく、正に夢の国の象徴であった。次に見物人の眼を奪ったものは素晴らしいサーカスの妙技であった。

ホテルへの帰途、Lido という料理店で、たっぷり夕食を食べた。午後十一時就寝。付近の教会の時刻^{とき}を告げる鐘の音で、ロンドンの Bow Bells を思い浮べる。また妙な連想だが、落語の「野ざらし」のことが思い出される。あのハッあんなる人物が「鐘がボーンと鳴りやさ、上潮、南風^{みなみ}さ、烏がとびだしゃ、こりやさのさ、骨があるさーいさい」と歌い出すあの場面が。また、エディンバラや、インヴァネスや、コペンハーゲンで Sea gulls (鷗^{かもめ}) の声が、朝しきりに聞えるのが妙に印象に残った。右の連想を駄句にして。

鐘の音に 野ざらし偲ぶ 鷗かな

八月十日

朝食を終り、十一時頃、ホテルを出て、付近の公園へ散歩に行く。園内の池畔を

ぶらついた。そして、シェラトン・ホテルの前に出た。そこから通りに面したショウ・ウインドウをのぞきながら、アンデルセン・ブルヴァールに出た。傍のベンチに腰を下して暫く休んだが、急にトイレに行きたくなり、正面にある市役所の大きな扉を潜った。こうした立派な建物だから、恐らく洗面所の一つや二つはあるだろうと、不敵にも速歩で廊下を通して、そのつき当りの階段を下りた所に、目指す場所が見付かった。これは何と立派な洗面所なのだろう!! 今までにお目にかかったこともない豪華なものだった。こんな所で、無断で用をたすのは罪深い業と思つた程であつた。事実、この建物は嘗ては大聖堂でもあつたのか、兎に角、莊重なスタイルのものであつた。

この建物の脇から、フレデリックスボルグ城（国立歴史博物館）と、クロンボルのエルシノア城への観光バスに乗って五時間の旅行を楽しんだ。

フレデリックスボルグ城の豪華な王室の部屋などを観た後、沙翁の四大悲劇中の随一、ハムレット劇の現場であるエルシノア城を見物した。第一幕で、お馴染な夜警交代の場面である城の外壁には夏草が茂っていた。

帰路、別荘風の瀟洒なカッテージの並ぶ静かな林を右に見て、左側には美しい海水浴場になっている岸辺から遙か海上を見渡す絶景に見入るうちに、バスは都心を目指して疾走し続けた。

午後六時半、アンデルセン通りへ帰って来た。

八月十一日

朝食後、恵美子と淳恵は買物に出かけた。専ら書籍あさり。二人が戻るまで自分は部屋に留まった。午前十一時にチェック・アウトしてから、付近の公園へ散歩に行く。

ホテルに戻り、タクシーを頼んで貰い、空港に向う。S A S機に搭乗。イギリス時間で午後五時ヒースロウ空港に到着。タクシーでピカデリー・ホテルに行く。今度の部屋は四四〇号。今までの中では一番良い部屋だった。

少憩の後、風呂に入ってから就寝。

八月十二日

朝食後、隣のスコットランド銀行で八百弗を磅に替えて貰う。四百四十五磅だっ

た。

十一時頃、地下鉄でピムリコまで行き、テート・ギャラリーまで歩く。ターナーをはじめとするイギリスの代表画家の作品が展示されている。ウィリアム・ブレイクや、コンスタブル等の作品が注目を浴びている。少々疲れたので、ベースメントの喫茶室でお茶を飲み、サンドウィッチを食べた。それから再び階上に上り、近代印象派の絵画を鑑賞してから、例のハムレットから取材したオーフィリアが水死する哀れな場面の絵画を見た。

テートを出て、チェルシー・ロウドのトマス・カーライルの記念館を訪れた。

少々距離があったので、タクシーにしたが、運転手もその場所がはつきりせず、付近にいた仲間のドライヴァーに尋ねる仕末だった。それほど今日の観光客には余り顧みられぬ名所になっているらしい。

この記念館に入ると、監理人は私共が日本からの観光客であることを大変喜んで、盛んに愛想よく説明してくれ、来訪者名簿を持って来て、それに、K. NATSUMEという署名を見せてくれた。この日本の文豪が、昔、第五高等学校教授時代に、二

々年間英国留学を命じられた当時を懐古するのであった。

自分が神中の確か三年生のとき、「カーライルの家を訪れるの記」という漱石の随筆を国語の教科書で読んだ記憶がある。この家は、自分がロンドン大学留学中、一度訪れたことがある。そのとき案内嬢は次のように説明してくれた。「詩人のアルフレッド・テニスンが、ある晩この家を訪れたとき、偶々^{たまたま}皓々たる月光の差し入る部屋の中で、主人公のカーライルとこの来訪者とは無言のまま、相對坐して、半とき余りに及んだ。この偉大な二人の文豪は、そのまま立ち上ると、Grand evening」（素晴らしい晩だなあ!!）と口を揃えて言った」という話を。因にこの案内嬢は漱石にも右のような説明をされた方だったが、もう相当のお年の方ようだった。

室内の遺品を見た後、裏庭に出て、写真を撮った。昔は、この屋敷の外壁に絡んでいた蔦には煤煙がべっとりとついていたが、今日では、その公害はないらしい。

八月十四日

正午ちょっと過ぎ、ヒースロウ空港を発ち、モスコウ経由、成田に向う。九時間後に無事成田に到着。そして同空港から箱崎に帰着。横浜から二郎と美保、辻堂か

らは純と美香が出迎えに来ていた。私達は夫々の車で帰宅した。

著 者 略 歴

1896年 横浜に生れる
1918年 早大文学部英文学科卒業
1929年 横浜高工教授
1950年 横浜国大教授
1962年 同大学名誉教授
専攻 英文学
著書 「寄席の息子と英文学」
「煙洲先生と横浜」

あの日あの時

昭和六十年七月十五日 印刷
昭和六十年七月二十日 発行

著 者 竹内秀雄

〒232 横浜市南区大岡一の二四の八
電話〇四五―七三一―一三八二

発行者

煙洲会代表 菅 要助

幹 事 村松四郎

〒135 東京都江東区豊洲四の六の二

印刷所 株式会社 白橋印刷所